非核平和都市品川宣言

2023　品川区平和使節

派遣レポート

Shinagawa City
品川区

※英文訳は巻末の発行者欄

非核平和都市品川宣言

今、この地球に、
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。
頭上に核の閃光がひらめく前に。
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日
品川区

「シンボルマーク」
※平和の象徴であるハトが爆弾をくわえていってしまうことを表しており、ハトには品川の文字をデザイン化しています。

はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から「品川区平和使節」として実施しています。令和 5 年度は、台風接近の影響で長崎への平和使節派遣が中止となったため、広島平和使節派遣のみの実施となりました。　※長崎平和使節派遣は代替事業を実施

広島平和使節派遣には品川区立中学校 8 年生 15 名、長崎平和使節派遣には一般公募の青少年 6 名が参加しました。また平和に関するパネル展示や区内のイベントに「折り鶴コーナー」を設け、たくさんの方のご協力をいただき千羽鶴作成しました。平和使節派遣生はそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、区民の代表として広島へ捧げました。

また広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や報告会などにおいて、派遣生一人ひとりが知恵を絞り、友達や保護者、地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、現地に行った派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました講師の髙品健二様、上野 勢以子様、木原 省治様、寺本 真理子様、広島市、長崎市、公益財団法人長崎平和推進協会、港区人権・男女平等参画担当および港区平和青年団の皆さま、千代田区国際平和・男女平等人権課および千代田区平和使節団の皆さま、平和の願いを込めて千羽鶴を折っていただいた皆さまほか、関係者の皆さまに心から御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

品川区

目　次

はじめに …… 1

第１部　中学生広島平和使節派遣
1. 行動日程表 …… 3
2. 広島での主な活動 …… 5
3. 感想文 …… 8
4. 被爆者講話 …… 21
5. 碑めぐり講話 …… 30
6. 成果報告 …… 32

第２部　青少年長崎平和使節派遣
1. 行動日程表 …… 41
2. 主な活動 …… 43
3. 感想文 …… 48
4. 派遣をふり返って …… 55

第３部　資料編
1. 広島
（1）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式 …… 57
（2）平和宣言 …… 59
（3）平和への誓い …… 61
2. 長崎
（1）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 …… 62
（2）長崎平和宣言 …… 63
（3）平和への誓い …… 65

第１部
中学生広島平和使節派遣

●派遣生

（A グループ）

東海中学校　：藤林　勇成
大崎中学校　：伊東　蒼馬
冨士見台中学校：鈴木　莉子
荏原第五中学校：相川　瑞歩
品川学園　：伊藤　瑞夏

（B グループ）

浜川中学校　：飯村　多聞
荏原第一中学校：小林　凛音
戸越台中学校　：愛甲　壮輔
日野学園　：遠矢　美海子
豊葉の杜学園　：菊地　慧琉

（C グループ）

鈴ヶ森中学校　：稲永　椎
荏原第六中学校：蓮沼　美優
伊藤学園　：白鳥　妃菜
八潮学園　：渡邊　栞
荏原平塚学園　：長谷部　仁菜

●引率者

大崎中学校副校長　：細川　大輔
荏原第五中学校教諭：石田　あかね
大崎中学校教諭　：重野　真介
総務部総務課　：木村　真澄

（敬称略）

1. 行動日程表

第 21 回中学生広島平和使節派遣　令和 5 年 8 月 5 日～7 日 (2 泊 3 日)

8月5日（土）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：50	集合・出発式	JR品川駅
8：46～12：33	新幹線乗車（品川駅～広島駅）	
13：15～14：00	昼食	芸州本店
14：30～15：10	原爆ドーム・平和記念公園等 見学	平和記念公園等
15：10～17：20	広島平和記念資料館見学	広島平和記念資料館
18：30～19：30	夕食	リバーズガーデン
20：00	ホテル着・一日のまとめ	マイステイズ広島平和公園前
22：00	就寝	

8月6日（日）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：00	集合・朝食	マイステイズ広島平和公園前
8：00～8：50	平和記念式典参列	平和記念公園
10：30～12：00	被爆者講話	広島ＹＭＣＡ国際文化センター
12：15～13：10	昼食	お好み村
13：20～14：10	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校平和資料館
14：30～17：00	グループワーク	広島平和記念資料館
17：10	灯ろう流し	元安川
18：30～19：20	夕食	リバーズガーデン
19：30～19：55	灯ろう流し見学	元安川
20：00	ホテル着・一日のまとめ	マイステイズ広島平和公園前
22：00	就寝	

8月7日（月）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	集合・朝食	マイステイズ広島平和公園前
9：00～10：45	碑めぐり講話	平和記念公園
11：30～12：15	昼食	芸州本店
14：03～17：49	新幹線乗車（広島駅～品川駅）	
18：00	解散式・解散	JR品川駅

◎事前学習会・事後報告会

第１回事前学習会　６月20日（火）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう学習しました。

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）広島平和使節派遣事業について
（4）広島・原爆について
（5）事前学習課題について
（6）派遣日程や生活面・健康管理について

第２回事前学習会　７月24日（月）

各グループが第１回の事前学習会で決めたテーマについてグループで発表・意見交換を行い、各グループでまとめ、全体へ発表しました。

《グループテーマ》

Aグループ
「復興しようと立ち上がった人々は
どのような活動を行い、今に繋げたのか」

Bグループ
「被爆後どのように乗り越え、
今に至ったのか」

Cグループ
「原爆が落とされてからの道のり」

（1）グループ学習
（2）「派遣のしおり」内容確認
（3）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月22日（火）

各グループで決めたテーマについて学んできたこと、今回の広島派遣で各派遣生が学んだことを一人一人発表しました。
また今回の広島派遣の経験を同年代に伝えるため、今後各学校で成果発表を実施するための確認をしました。

（1）発表準備　（2）派遣の感想発表
（3）各学校における成果発表について

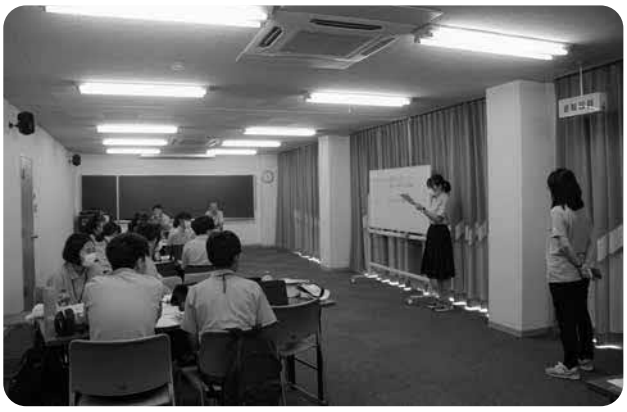
2. 広島での主な活動

1日目（8月5日）

・品川駅から出発
・平和記念公園見学
・千羽鶴を捧げる
・広島平和記念資料館等見学

2日目（8月6日）

・平和記念式典参列
・被爆者講話
・昼食（広島名物お好み焼き）
・グループワーク
・灯ろう作り



3日目（8月7日）

・碑めぐり講話
・解散式

3. 感想文

人の力

東海中学校　藤林　勇成

新幹線で親睦を深めていると、東京と変わり無い景色が広がっていました。

その時は、此処が原爆の被害を受けた地なのかと実感が湧きませんでした。

まず、原爆ドームを見て驚きました。何故ならば、嘗ての原爆ドームは三つの棟があり、綺麗な壁にガラスの窓牖があったからです。それが今は一棟丸々消し飛び、屋根は骨組みだけとなり、煉瓦の壁は所々無くなっている。そんな建物となっているのです。広島に来て早々、原爆の禍殃の片鱗を垣間見た気がしました。想像を遥かに絶する地獄絵図であった事は考えつけど体験には及びません。百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一験に如かずといった事を感じました。

その後平和の灯火に向け御霊を悼み、平和記念資料館に入りました。添えられた文からは心境がありのままに感じられ、絵や写真からは原爆の惨状を見る事ができました。そして焦げた服という非日常極まりない物を見て一瞬にして原爆は日常を踏み躙っていったのだと確と分かりました。見て回っていると人影の石が見えました。聞いた事はありましたが見るのは初めてです。本当に染みと言われれば納得してしまう程の黒い影だけがありました。説明文を見てこの人影が自分の家族ではないかと思う人も複数居ると言うことを知り、遺族たちは何を見出して何を望んでその申し出をしたのか、本人自体は何を思って自分の終わりを経験したのかそんな事に思いを馳せました。更に行けば、手の甲や腕が爛れた男の子の写真や死の斑点の写真、ケロイドの写真などが見えてきました。皮膚が爛れた事などない、どれほど痛いのだろうか。死の斑点が出た事などない、どれほどの絶望だろうか。ケロイドなど現れた事などない、どれほど奇異の目に晒されるのだろうか。再び分かり得ない事を考え始めました。

日を越し、記念式典に参列しました。近くには肌の色も服装も違う様々な人が通ります。殆どの物が違いますが、確然として同じものは、平和を望む心です。「核兵器により世界が危うくなる」との考えもあれば、「核兵器により世界が平和になる」といった真逆の思想もある。世界が一つに、そんなことは絵空事でしょう。全員が死の淵にでも立たされない限り。

そして、式典は幕を開けました。私が驚いたのは小学六年生の子供が声色を変え、心を揺さぶる演説をした事です。その演説は意味が伝わらずとも気持ちがしかと人々の心に伝わったものだと思います。式典が終わり夜になって灯篭流しを見ました。中々に綺麗な光景でした。これに乗っかった想いが届けば良いなとふと思いました。

広島派遣を経て、私はこの日常が続くことが平和なのだと改めて感じるとともに、その価値を忘れないでいこうと強く思いました。

失われてしまったもの

大崎中学校　伊東　蒼馬

1945年8月6日、平和だった広島市に一発の爆弾が落とされ、一瞬にして何もかもが失われてしまった。

私は広島へ行き、原爆投下について学ぶため、さまざまな場所を巡りました。その中でも特に印象に残ったのは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の平和祈念・死没者追悼空間での約14万個ものタイルです。この14万という数字は原爆投下によって亡くなった人と同じ数です。実際に見るまではあまりに大きな数なので、どのくらいの被害があったのか頭で想像することはできていませんでした。しかし、自分の目でその膨大な数を目にすることで失われてしまったものの重さを知りました。

祈念館の追悼空間へは長いスロープを降りていくことでたどり着きます。追悼空間は半径5mほどの円形の空間になっており、天井は8mほどの高さで、壁面には爆心地から見た被爆後の広島の街並みが描かれています。その壁一面にタイルが貼り巡らされていました。一見すると本当にただの壁と見間違えるくらいに一つ一つが小さく、思わず声が漏れてしまいました。このタイルの数だけ私たちと同じような幸せがあり、平和な日常があったと思うと、たった一発の爆弾によって失ったもの一つ一つの重みは計り知れないものだと、14万という数字を自分の目で直接見て改めて感じました。

2日目に被爆者の髙品健二さんからお話を聞く機会があり、髙品さんは原爆が投下される前の広島は比較的平和だったことや、どのようにして原爆が投下されたのかなど様々なことを話して下さいました。その中でも原爆投下からの復興や、生活の変化など体験者の人にしかわからない話からは、一生懸命に生きてこられた事が伝わってきました。最後に髙品さんは戦時中の生活は人それぞれなのでみなさんも周りに戦争を体験した事がある方がいるのなら話を聞いてみてくださいとおっしゃっていました。私の祖父も戦前の生まれで、よく戦時中の話を聞くのですが、それは祖父本人にしかわからないエピソードです。戦争の記憶というものは知らないだけで沢山身近にあります。14万個のタイルと同じようにその記憶一つ一つにたくさんの想いが詰まっているのです。私は広島で様々なものを見てきましたが、戦争の被害を受けた地域は広島以外にもたくさんあります。失われてしまった命は14万よりももっと多いのです。きっとどれだけ並べても収まりきらないほどの数のタイルになるでしょう。

戦争が失わせたものの重さは計り知れません。私たちがその重さを背負い切ることは今を生きている私たちにはできないと思います。しかし、二度とこの事を繰り返さないようにする事はできるはずです。私は平和についてみんなが向き合っていける世の中にしていきたいと思います。そのために広島で学んだ平和を少しでも周りに伝えていき、多くの人が平和に対する考えをもてるようにしていきたいです。

私の責任

浜川中学校　飯村　多聞

1日目には、広島平和記念資料館で原爆による被害の実相を知ろうとしました。入る前の「まあ言うほど衝撃的な内容は無いでしょう。」という私の甘い考えは、すぐに打ち砕かれることになります。そこで当時の被害の様子を写した写真を目にしたとき、私は愕然としました。立ち上るキノコ雲、人骨の山、目が飛び出した死体、全身やけどで水を求めてさまよう人々……今では考えられないようなことが、そこでは確かに起こっていたのです。そこに写っていた人々の顔は、どれも悲しく、切ないような顔をしていました。

また、人と同じように被爆した、焼け爛れた

服や焦げた壁などもあり、それらからは原爆という凶悪な兵器に苛まれ無念の死を遂げた人々の姿が脳裏に浮かびました。被爆者講話をして下さった髙品さんの話によると、現在展示されている資料は実際の被害の1/10程度に過ぎないそうです。これ以上に恐ろしいことがあったと考えると、思わず身震いしてしまいます。

私は、これらの資料を見て、なぜ広島や長崎の人々はこのような目に遭わなければならなかったのかという切実な思いと共に、原爆投下への疑問がより一層深まりました。

2日目、私たちは広島平和記念式典に参列しました。まず、参列者の数に圧倒されました。ホテルの上階から見ると、まだ式開始まで1時間以上もあるというのに、既に平和記念公園の周りには沢山の人が並んでいました。それだけ平和を願う人々が多いと考えると、感慨深い気持ちになります。また、外国人の方々も多く参列しており、原爆や戦争について知ろうとしている人がとても多いことへの感激と、平和を望んでいるという認識は世界共通のものだと改めて感じました。

式には、岸田総理大臣をはじめとした日本の人たちや、各国の首脳や来訪者なども数多く集まっていて、現場でしか味わえない独特の迫力や緊張感を肌で感じました。そこに自分が加わるということによって生じる、この事実を「伝えていく」という責任を、これから生きていく中で果たしていきたいです。

この3日間で、学んだことが沢山ありました。それは、知識や生き方など様々です。その中で解決した自分の疑問もあれば、また新たに生まれてくる疑問、疑念もありました。その答えは、私一人で悩むのではなく、皆で考えて出していくべきものではないのでしょうか。私は、その第一歩として、戦争の悲惨さや平和の尊さを広く「伝える」という責任を果たそうと思います。

想いを紡ぐ

鈴ケ森中学校　稲永　椎

「ミーン、ミンミーン」降るような蝉時雨が絶え間なく鳴り響く。煌びやかな日光を存分に浴びて緑が生き生きと生い茂り、空には真っ白な入道雲が湧き上がっている。2023年8月6日の広島県広島市。

もし何も知らない人がこの景色を見たら、何を思うのだろうか。ありふれた日本の夏の風景に見えるかもしれないし、自然が生み出す平和な景色に癒されるかもしれない。誰も78年前の今日この時にこの場所で原爆が落とされたなんて、考えもしないだろう。

原爆が落とされたばかりの広島を収めた1枚の写真がある。あたり一面の焼け野原に、灰色の空。木々の緑は枯れ落ちている。写真から行き場のない怒りや苦しみの声が聞こえるような気がして、いたたまれない気持ちになった。そんな「75年は草木も生えぬ」と言われた広島の地は、道のりこそ険しかったものの今や完全に復興を遂げている。その背景にあるのは、今も尚変わらない人々の強い想いだろう。愛する広島を取り戻そうとする想い、苦しみから立ち上がろうとする想い、未来へと繋ごうとする想い、亡くなった家族や友人への想い…。その数は形は、計り知れない。

この地球には、約80億人もの人間がいる。多すぎて途方に暮れてしまうような数字だからか、その中のたった1人である自分が何をどう思ったって世界は少しも変わらないと思い込んでいる人がいるのではないか。それは違う。人の想いというものは、時に何よりも強力な力になる。私たちが今すべきことは、広島の人々の

「想い」を受け継いで、世界へと響かせることだ。

先程言った80億人の中には、日本のように核廃絶に賛成する人もいれば、広島・長崎への原爆を正当化して捉えている人、核は不可欠だと考える人、戦争が無くなると困ると考える人がいる。私たちからしたら信じられない考えだが、それぞれに事情があり理由があり、簡単に覆せるようなものではない。みなさんもご存じの通り、今の地球は気候変動や環境問題などの様々な危機に追われている。そんな中私たち人間に出来ることは争いや差別ではなく、互いに手を取り合うことなのではないだろうか。挫けず広島・長崎の記憶を発し続けた未来に、「核をもたせない世界」よりさらに上の、「核を持つ必要のない世界」が来ることを願っている。

現在、被爆者の方々の平均年齢は85歳を超えた。本格的に、私たちの世代にバトンが渡されようとしているのだ。そのためにも私たちは歴史を学ぶ。核兵器の使用を阻止するために。青空が再び悲しみの灰色に染まることのないように。大切な人の笑顔を守るために。

落ちてきた太陽

冨士見台中学校　鈴木　莉子

太陽が落ちてきた。碑めぐり講話をしてくださった上野さんのお母さんがいった言葉だそうだ。実際に原爆が爆発する瞬間、落下中心地付近では約3,000度から4,000度の高温になった。太陽の表面温度が6,000度ということを考えれば、どれほど原爆というものが恐ろしいのかが想像できるだろう。人々の生命の源である太陽に見えたそれは、人口的に作り出された、不幸の源だったのだ。

1945年8月6日午前8時15分、広島に一発の原子爆弾が投下され、強烈な熱線と放射線が四方へ放出された。熱線や爆風、放射線による被害だけでも約14万にもの人々が命を落としたと言われている。原爆が落ち年月が経っても、ケロイドや白血病やがんといった身体的な後遺症や精神的な後遺症に苦しめられた人々も多くいたそうだ。ある日突然奪われた命や未来。学校や職場に行く人、食事をとっていた人もいただろう。そんなごくありふれた日常を原爆は突然に奪いさったのだ。

広島派遣に行き、碑めぐり講話で見た「平和のともしび」の説明がとても心に残っている。「平和のともしび」とは、手のひらを合わせた形のように見える火がともっているもので、様々な行事に平和のシンボルとして使われている。平和のともしびは消えることがなく、世界から核兵器がなくなった時に消える。上野さんはそんな説明をしてくれた後、こんなことをおっしゃっていた。「核爆弾は人間が生み出したものなのだから、人間しか無くすことはできない。平和のともしびが手のひらの形に見えるのは、そんなメッセージが込められているんじゃないか。」と。その言葉を聞いた後、私たちが核爆弾を無くすしかないのだと、強い使命感に駆られた。世界にはたくさん戦争している国や、戦争に備えて準備している国が多くある。それがどれだけ愚かなことなのか、まずは自分自身が正しく認識し、平和に対して私は何をすることができるのかを考えていくべきだと思った。

広島派遣に行く前は、戦争や原爆といった辛い現実を受け止めたくなかった。派遣に行ったことによって、「戦争」という現実から目を背けずに事実を受け止めること。そして、その事実を忘れないこと。それらのことがどれだけ重要なのか理解できるようになったと思う。そして、生涯に渡り1人でも多くの人に伝達できる知識や感情を養うことができた。

また、私たちが原爆、戦争というものを完全に理解する日は来ないと、被爆者講話で髙品さんがおしゃっていた。それは、当時の体験をしていない上、原爆が落ちた日から年月が遠ざかり、原爆や戦争があった時の悲惨さが薄れ平和なこの世の中を過ごしているからではないか。だが、私は、完全に起きたことを理解することはできないけど、１つ１つの点のように少しずつ学んでいけば、いずれ、完璧ではないけど球に近い形にすることができると思う。その球が風船のように世界に飛び立ち、その学びを運んでくれたらと、心から願う。私たちは起きてしまった悲劇から目を逸らさずに、少しでも原爆がどのようなものなのか理解する努力をし続けなければならない。

幸せ

荏原第一中学校　小林　凛音

青い空。綺麗な街並み。笑顔な人々。今の広島には沢山の幸せが満ち溢れています。

今から 78 年前、原爆が落とされ、辺りは焼け野原となり人々の幸せを奪いました。

今回、貴重な体験を経て、同じ人間同士が戦いあう恐怖を身に染みて感じることができました。資料館や文献を見て、戦争での苦しさ、原爆を落とした人への憎しみ、そして何より家族を失った悲しみなどが文や残っていた資料などから溢れ出していました。身体的な外傷ができてしまっている兵隊さんや小さい子供。すごくショッキングでした。身体中が火傷に覆われ、息をするだけで身体中に痛みが走り、歯を食いしばっている方の資料や、もう意識の無い目の飛び出た兵隊の方の資料。唖然とこれを見ている自分がとても情けなく思う程、ショッキングな資料でした。被爆者講話をしてくださった髙品さんが、「これはほんの一部に過ぎない」、「子供が食欲の失せてしまったから展示をやめてほしいと言われた」とおっしゃっていました。私はこれを聞いて少し不満の気持ちを抱きました。もう二度とこんなことを起こしてはいけません。だからこそ原爆の恐ろしさを戦争を知らない現代の子が、次の世代まで語りつくべきなのではないでしょうか。今の日本があるのは復興に立ち向かってくれた先祖の方々のおかげであると私は考えています。昔の方々の苦労を隠して欲しいと思う気持ちがよくわかりませんでした。ですが被爆者講話で感動したお話がありました。様々なリアルな話を聞いて圧倒されることがたくさんありましたが、その中でも派遣生が『戦時中、唯一の幸せはなんですか』と質問された時、「人と笑顔で話す事、笑顔で話しかけてくれる事」とおっしゃっていた事です。家族を失ったり、身体もズタボロになり、心身共に傷ついていても同じ状況下だからこそ優しい気持ち、優しい心を持って復興の道を進み、今の広島があるのだと思いました。そして何よりすごいと思ったのはみんなが前向きだった事です。痛みや苦しみがたくさんあっても町の警察官や、医療機関の方々は町の人を助けました。本当の団結を見て震えました。髙品さんが今の子達に伝えたいのは「今の生活は幸せ」という事です。私自身も学校に行くのめんどくさいなとか、このごはんあんまり好みじゃないなとか日々思うこともたくさんあります。でも広島に行ったことにより、これは幸せなわがままなんだなと気付かされました。過去のことではありますが、この原爆が落とされた事や戦争があった事は作り話でも盛られた話でもありません。今、暮らしている日本で起きたことです。黙祷をきちんとしたり、社会科で学んだ事に関心を持ったり、日常生活で出来る事はたくさんある

と思いました。今回学んだ事を、次の世代に受け継いでいきたいです。

人の想いを受け継ぐこと

荏原第五中学校　相川　瑞歩

1945年8月6日8時15分広島に原子爆弾「リトルボーイ」が投下され、14万人もの尊い命が失われました。これを初めて聞いた人は「14万人か、多いな。」と感じるだけだと思います。私はそれだけで14万人という事実を終わらせてはいけないと思います。この14万人にはひとりひとりの思いがあり、自分のあたりまえだった日常があり、大切な家族や友人がいます。たった一瞬でそのひとりひとりの想いが壊され、自分のあたりまえがあたりまえではなくなり、大切な家族や友人を失う。当時の様子や亡くなった人々のことを思うと私は胸が張り裂けそうになります。また、ここには14万個の人生があり、学校に向かっていた人、仕事をしていた人、寝ていた人、ご飯を食べていた人、いろんな人がいると思います。被爆者講話の方から聞いた話の中で黒焦げになった弁当の話がありました。久しぶりに手に入れたお米を母はこの弁当に入れ、子供は「楽しみ」と言って家を後にし学校に向かいました。学校で集まっていたとき原爆が投下され、残ったのは変形した弁当と黒焦げの中身だけでした。このことを聞かされた母は道路で泣き崩れたそうです。せっかくのお米を子に食べさせてあげられると思ったのに、帰ってきたのは弁当のみ。きっと母親は、子を失った悲しさと、何もしてあげられなかったという悔しさを戦後も一生抱えて生きたのだと思います。もしこれがあなただったらどんなことを思いますか。この母親は、あの日学校なんかに行かせなればよかったと思い、戦争や原爆が二度とないように願ったのではないかと私は考えます。亡くなった人の人生14万個は終わり、その家族や友人の人生にも深い傷を与え、前までのあたりまえが全てなくなった。それがたった一発の爆弾で行われた。私はそれがどんなことよりも恐ろしいと感じました。

私がこれから平和な世界を作っていく上で大切だと考えるのは被爆者の想いと願いを受け継いでいくことです。もちろん、原爆ドームや資料館の展示物で、当時の被害の様子や規模を伝えることができます。しかし、もし核兵器を使おうとしている国に訴えるのなら大変さを教えたところで、使用の中止を検討することさえしないでしょう。核兵器を使うのは人間だから、物で訴えるのではなく、人の思い・願いが必要なのです。人の思いと願いであればそれを他人事ではなく自分事として受け止めることができ、自分だったらどんな気持ちになるか想像することができます。そこで、人を殺すことの残酷さに気づくことができるのではないでしょうか。私が伝えたいことは、戦争・原爆とは人の人生を終わらせて、あたりまえをなくす醜いものであるということです。

今回の派遣を通して私が学んだのはあたりまえは幸せだということです。好きなだけ食べられるご飯がある、家族や友人と笑い合って過ごせる、欲しいものはすぐに手に入れられる、これがどんなに幸せでありがたいことなのかわかりました。私は今回学んだ戦争・原爆の恐ろしさをいろんな人に伝えていくとともに、あたりまえに感謝しながら１日１日を大切に生きたいです。

平和へのバトン

荏原第六中学校　蓮沼　美優

平和とはなんだろうか。私は広島派遣に行

く前は、平和とは戦争がないこと、核兵器がなくなること、それは世界中の人が思っている平和だと思っていました。しかし、広島に行くと誰もがそう思っているわけではないことがわかりました。派遣の二日目、平和記念式典に参列して内閣総理大臣や県知事の方のこの過ちは繰り返してはならないというスピーチを聞きました。私はその通りだ、きっと誰もがそう思っているだろうと思っていました。しかし、そのすぐ後ろでは核兵器は所有すべきだという大規模なテロが起きていました。私はどうしてそういうことが起きているのかわかりませんでした。核兵器がなければたくさんの方が亡くなりたくさんの方が傷ついたり街が破壊されることがないんだから核兵器がなくなることが一番いいのにと思いました。しかし、そのあとに実際に被爆した髙品さんのお話を聞いて幸せは人によって違う、それぞれが幸せを求めるから戦争が起きると教えてもらいました。また、原爆が投下された広島も戦争に参加していて他の国を攻撃していました。日本は被害者だけではなく、だから記念式典でも反対の声があがっていたのだとわかりました。そして被爆の体験を聞いて、街が焼け野原になったこと、言葉では表せない原爆の威力がとてもよくわかり、胸が痛みました。そして、今私たちがここで被爆してしまったらと考えさせられました。人によって幸せは違っても、もう一度核兵器が使われることは絶対にあってはならないことだと改めて思いました。今の日本は戦争が身近になく戦争を軽く見ている人が多いと思います。しかし、ロシア・ウクライナなど今も戦争が続きたくさんの人がなくなっています。だからこそ、この広島での出来事や戦争を自分ごとと見て向き合っていかなければいけないと強く感じました。私がこの広島派遣で戦争の恐ろしさ、平和についてなどをしっかりと学び、私が伝えていかなければいけないと思いました。

今、被爆した方の高齢化が進み実際にお話を聞ける機会がとても少なくなっていますが、今の私たちがいるのは被爆した方が大切なひとがなくなったり自分自身も傷ついても必死で命を繋いでくれたからです。その私たちができることは被爆者の方の想いを受け継いでこの広島での出来事が忘れられることがないようにすることだと思います。広島で原爆が投下された８月６日、長崎で原爆が投下された８月９日、８月15日の終戦記念日、その日にほんの少しでもこの出来事を思い出すことがとても大切です。皆さんは友達に軽い気持ちで「バカ」や「死ね」と言っていませんか？命を大切にすること、友達に優しくすることが平和への第一歩だと思います。この広島派遣での学びを生かして、戦争を自分ごととして捉え、核兵器廃絶・世界平和へのバトンを繋いで行きたいです。

自分なりの平和

戸越台中学校　愛甲　壮輔

二〇二三年八月六日。平和記念式典で湯﨑英彦広島県知事が挨拶の中で語った言葉。

「ウクライナが核放棄をしたから侵略を受けているのではありません。ロシアが核兵器を持っているから侵略を止められないのです。」

この言葉は、原爆の脅威がいかに不条理なものかを語っていた。その夜、被爆者講話や灯篭流しを体験した私は、あることに気づいた。「平和」とは、人それぞれ何かに感化されたり、自ら考えたりしたもので、各人それぞれ違うものなのだと。それが今までボンヤリとしていた「平和とは何か」について、考えるきっかけとなった。そして、平和使節派遣の三日間で、様々な

形の「平和」と対峙した。

一つ目の「平和」は、前述した湯﨑英彦県知事が訴える「平和」だ。「核による格差があるから、戦争は無くならない。」私はこの考えを受けて、核廃絶こそが「平等という平和」の第一歩だと思った。核抑止とは、核があるからこそ、どの国からも攻撃されなくなることを意味する。しかし、ロシアとウクライナの戦争では、それとは真逆のことが起きている。核により他国の介入を防ぎ、核の存在をチラつかせて一方的な侵略を行っている。このように、核兵器による反撃を恐れさせることで、攻撃を思いとどまらせるという核抑止論は、逆に核の廃絶を困難にさせている現状がある。本当にそれでいいのだろうか。

私は核の廃絶こそが、国家間の関係を「平等」にし、社会問題解決の架け橋になると考えた。

二つ目の「平和」は、被爆者講話をしてくださった髙品さんの「平和」だ。髙品さんは、人と人が手を繋いで、より良い未来に向かうことが「平和」だと言っていた。

髙品さんの友人で満蒙開拓団として広島から送られた人がいる。（満蒙開拓団は、満州・蒙古の農業を中心とした問題の解決や、開拓を行うことを目的とした農業移民団のことを指す。）

髙品さんの友人は、力で制圧するのではなく、話し合い、手を取り合いながら、問題を解決していった。髙品さんの友人が一度日本に帰って、また満州に戻った時も、現地の人に快く迎え入れられていたという。戦争中であっても、人と人が手を取り合って、未来に進むことができる。人間にはそれを叶える力がある。髙品さんはそう語っていた。

三つ目の「平和」は、碑巡り講話をしてくださった木原さんの「平和」だ。木原さんは何気ない日常こそが「平和」だと言っていた。木原さんは母親から、原爆投下前の中島地区は穏やかな街で、人もたくさんいたという昔話を毎日聞いていた。母親をはじめ、広島の人々の生活を一瞬で壊した原爆を、決して許してはいけないという強い思いを受け取った。だからこそ、何気ない、人々の日常の営みこそが「平和」なのだと。

この三つの「平和」を受けて、私も自分なりの「平和」の形を考えた。それは誰しもが平等で対等に話し合える機会があることだ。誰でも意見を出せて、全員が多様な意見の中で手を取り合って、試行錯誤して前に進む。私は、この話し合いの機会にこそ、核廃絶をはじめとする、ジェンダーレスや貧困格差などの、全世界共通の社会問題を解決できる可能性を感じている。このような機会が一つでも増えることを願う。

皆さんの「平和」とは何だろうか。より良い未来に進むためにも、自分なりの「平和」について考えてほしい。

「満足して、生きること」それが平和

日野学園　遠矢　美海子

私は「平和の大切さ」「暴言が日常化していることが、よくないとみんなに伝えたい」主にこの二点を学ぶために広島平和使節団に参加しました。

私は広島で三日間を過ごして「平和」に対する考えが変わりました。最初は、世界共通の平和という概念があると思っていました。

一九四五年八月六日午前八時十五分、アメリカ軍の爆撃機エノラ・ゲイが広島市上空で原爆を投下しました。一見すると、原爆を落としたアメリカが悪く見えるこの文章。ですが、アメリカは長期化する戦争を終結させるため、原爆という手段を選びました。アメリカが原爆を落

とさなければ、原爆で苦しむことはなかった。しかし、終わらない戦争で苦しみ続けることになっていたかもしれないと考えると、正しさとは何なのか、私たちが求めている平和とは何か、わからなくなってしまいました。

原爆の与えた影響として、熱線によって、ケロイドという火傷が治りそこが盛り上がる状態になったり、爆風によって建物は壊れ、壊れた建物の下敷きになって亡くなる人、さらに飛び散ったガラス片が刺さり怪我をしたり、大人から子供まで多くの人が亡くなりました。原爆によって放出された放射線を浴びた人は、戦争が終わった後も後遺症、また、被爆者だからといって差別され、心身ともに被害を受けました。

私が、広島平和派遣で学んでいくなかで、一番大きく、影響を受けたのは被爆者講話でお話ししてくださった、髙品さんの言葉です。

「平和とは、なんだと思いますか。」という質問に対して「生きていて、それが満足していること。」とおっしゃっていました。生きていると、多くの人と出会えるからだそうです。また、「被爆者になってから、幸せと感じたこと、笑顔になったことはなんですか。」という質問に対して「悲しいことが多いけど、笑顔で話してくれることが一番嬉しかった。」とおっしゃていました。私は、これらの言葉を聞いて、平和は人それぞれ違うこと、また、悲しみの中でも人と接することが、大切なのだと気づきました。

三日間の広島平和派遣を通して、人々の思い合う気持ちが復興につながり、未来につながったということがわかりました。また、多くの人の「平和」が混ざり合い、生まれた、今、そして今日。その、今日を過ごす私たちは、多くの人の「平和」「思い」を胸に、お互いを尊重し、笑顔で過ごさなければならないと、私は考えます。

『微力な私にできること』

伊藤学園　白鳥　妃菜

私は、曽祖母が長崎で被爆していた事実を受け、被爆四世という身の私に何ができるのか、現地に赴いて考えたいと思い、今回広島派遣に応募しました。8月5日から8月7日の3日間で、様々な発見と驚きがありました。まず、広島駅に着いて外に出たときのことです。そこには被爆したとは思えない、とても発展した街が広がっていました。あの驚きは、現地に赴かないとわからないことだと、まず初めに思いました。1日目は平和記念公園、原爆ドーム、平和記念資料館、原爆死没者平和記念館などを見学に行きました。そこで初めて原爆ドームを間近で見て、私の体全身に驚きが走りました。途中で柱が折れて、折れた部分から下の柱が爆風で飛ばされ、数十メートル先に、まるでベンチのように横向きに転がっていたのです。柱が折れても形状を保っていられるような強い建物を、ここまで壊す勢いがあるのが原爆なのだと、改めて痛感しました。また、平和記念資料館では、染抜き作業が行われてもなお、血の跡が少し見られるような服が大量に置いてありました。あまり衝撃的な内容にならないように、少し展示物が変わったと聞いていましたが、それでも、途中で足が止まってしまうような箇所がありました。初日からとても衝撃を受けたからか、この日はあまり眠れませんでした。2日目は、平和記念式典への参列、被爆者講話、袋町小学校の見学、灯籠流しをしました。平和記念式典では、式典開始までの時間、椅子で待機していたとき、世界各国の方々が国際席へと向かっており、原爆投下が世界規模で向き合っていかなければならないことなのだと、改めてわかりました。被爆者講話では、講話をしてくださった髙

品さんの「今生きられていることが幸せ。」という言葉がとても心に残りました。私自身、「ああだったらいいのに。」などと、この恵まれた世の中でもたくさんのことを望んでしまいますが、それは、恵まれているからこそできることなのだと思いました。また、「平和記念資料館にあるあの展示物などは、規模としては実際の十分の一ほどだ。」と仰っており、あれ以上の光景を間近で見て、なおかつ自分たちの心身の傷と向き合って生きてきた被爆者の方々の精神的な強さがうかがえました。灯籠流しではチームリーダーだったため、代表で灯籠を元安川に流しました。何も知らない人からしたら、「川にたくさんの火がついた灯籠が浮かんでいて、とてもロマンチックだな。」という感想をもつと思いますが、ここに 78 年前、原爆で亡くなった方々のたくさんのご遺体があったと思うと、見える景色が変わりました。3 日目、碑めぐり講話をしていただきました。私の心の中に一番残った言葉は、碑めぐり講話をしてくださった寺本さんの、「私たちは微力だが、無力ではない。」です。秋の学芸発表会では、約 500 人の前で広島派遣報告を行います。その中の数人でもよいので、誰かの心の中に残るような報告をしたいと思いました。また、平和記念式典に参加できたことなど、貴重な体験をたくさんさせていいただきました。広島派遣報告だけに留まらず、被爆者講話を聞けなくなってしまう世代の子供達に、広島派遣の経験と結びつけて広島・長崎の惨状も伝えたいと強く思いました。

ヒロシマと平和

八潮学園　渡邊　栞

「平和とは何ですか。」こう聞かれたらあなたは何と答えますか。ヒロシマへ派遣生として訪れるまで、私は「平和とは誰も傷つけられない世界」だと考えていました。しかし、今回 3 日間の広島派遣を通して、「平和とは何か。」という質問に対して、私の結論は「平和という言葉の意味は一つではない、生きてきた環境によって変わるもの」へと変わりました。

ここでは、3 日間の広島派遣で私の考えが変わったきっかけの言葉を 2 つ紹介していきたいと思います。

最初に考えが変わったきっかけは平和記念式典で小学 6 年生の子ども代表勝岡さんによる「平和への誓い」を聞いたことです。「平和とは争いや戦争がないこと。差別をせず、違いを認め合うこと。悪口を言ったり、喧嘩をしたりせず、みんなが笑顔になれること。」という言葉です。曽祖父が被爆したという勝岡さんの言葉にとても重みを感じました。平和について私も同じ考えですが、自分の言葉は何故だか薄っぺらく思えました。

2 つ目のきっかけは、当時 9 歳で被爆して右耳がほぼ聞こえなくなってしまった髙品さんの講話を聞いたことです。「平和とは何ですか。」という質問に対し、髙品さんは「平和とは生きること」と答えました。少年時代は普通のことが普通にはできなかった時代だったのだと伺いました。好きではない仕事も生きるためにはしなくてはいけなかった。講話の中で、髙品さんは、語り手として自分が生きていた時代は生活するのがとても大変だったことをいくら伝えても、今を生きる若い人は衣食住に困ることがなく、死が隣合わせにいるような緊張感もなく日々の生活が十分に恵まれているため、当時の辛さを理解することは到底できないとおっしゃいました。

私は理解しているつもりでいたのでその言葉に少しショックを受けましたが、私たちにとっ

て「ただ平穏に生きること」はあまりにも日常的なのです。その当たり前の上で「平和とは誰も傷つけられない世界のこと」だと考えていたこと、だから自分の「平和とは何か。」は薄っぺらく思えたのだと気づきました。「平和とは何か。」という質問に対して、勝岡さんと髙品さん2人の想いが「平和とは何かの答えは1つだけではなく、たくさんの考え方、人の想いがある」という考え方に変えてくれました。今回ヒロシマへ派遣生として訪れ、人それぞれの「平和」という言葉に対する考え方想いに触れて、自分の「平和」に対する考えを見直すことができました。私は、自分の「平和とは何か。」ということをこれからも考え続けていきたいです。

平和な世界を目指して

荏原平塚学園　長谷部　仁菜

私は広島に着いたとき、街並みの綺麗さに驚きました。緑が多く水が流れる自然豊かな街でした。また、外国人や日本人観光客も多く人で溢れた都市でした。こんなに美しく活気がある街に原爆が投下され、焼け野原になったとは思えませんでした。

1日目に行った平和記念資料館には皮膚が焼けただれた写真や焼けこげてしまった服などが展示されていました。それを見て思い出すだけで怖い記憶が呼び起こされてしまうような体験や写真をなぜたくさんの人に見てもらえるようにしてあるのか疑問に思いました。そんな疑問を持ちながら広島派遣が始まりました。

私は今回の広島派遣を通して心に残っていることが2つあります。

1つ目は、碑めぐり講話で平和の灯は世界全国で核兵器根絶が実現するまで燃え続けると学んだことです。この灯は1964年8月1日に点火されて以来ずっと燃え続けています。現在世界では核はロシア、アメリカをはじめとする9カ国が保有しており、全世界では推定12,500個あります。その多さに私は愕然としました。私はこの多くの核兵器を根絶させるために核兵器の保有に対する考え方を全世界が一致させる必要があると思います。それは難しいけど必ず実現して欲しいです。

世界中の人が平和な世の中が良いと思っているはずなのに核の保有に対する考え方が違うために核を持つ国が存在し戦争が起きています。そのようなことを無くして平和の灯を1秒でも早く消したい、核の保有国を少しでも減らしたい、と強く思いました。

2つ目は、講話をしてくださった被爆者である髙品さんの「平和とは何か」が「生きること」だったということです。私が思う平和は「差別がないこと」「争いがないこと」「誰ひとりくもった顔をせず嫌な思いをしないこと」でした。髙品さんが「生きていること」と仰っていたのは今現在当たり前のように生活できているからだそうです。生きていれば色んなことがおこり、それが楽しいと仰っていました。私は生きていることは当たり前で、それを前提として人間関係に関する平和を考えました。「生きること」と仰った髙品さんのように戦争を体験した方は生きることさえ辛い生活をしていたのだと思い毎日の生活を大事にしているのだなと感じました。今の生活が平和であり決して当たり前ではないのだと気づきました。

こんなにも辛い経験をお話してくださった髙品さんのおかげで私は初日に感じた疑問を解決することができました。それは二度と同じ過ちを繰り返さないため、核のない世界にしていくためだと思いました。私も髙品さんのように今回の経験や感じたことを周りの人に話し、原爆

や戦争について多くの人に知ってもらいたいです。これから私は少しでも自分にできることを見つけて平和な世の中を目指していきたいです。

知る、そして考える

品川学園　伊藤　瑞夏

2023年8月6日午前8時15分、晴天の空の下で黙祷が行われました。この時、日本ではいったい何人の人が黙祷を捧げたのでしょうか。78年前のこの日、たくさんの人の夢と未来がこの空に落とされた一発の原子爆弾によって壊されてしまいました。高度10,000mから落下した爆弾は、14万人もの日常を一瞬にして奪ったのです。私は初めにそれを聞いた時、実感が湧きませんでした。「この平和な日本でそんなことがあるものなのか」と、信じられなかったです。広島に行く時も、頭でしか理解していないまま行ったと思います。広島に行って、被爆当時の資料や被爆者の方々のお話を聞いているうちにだんだん原爆、戦争という出来事がどれだけ悲しく、ひどいものだったのかを実感しました。そして被爆した方の想いについて考えるようになりました。

1日目。平和記念公園についた私はその緑の多さに驚かされました。公園はビルが立ち並ぶ都会にポツンとあり、そこだけ別の場所にいるような感覚になりました。平和記念公園は爆心地から約190m離れたところにあって被害は壊滅的だったということは事前学習の時に学んでいましたが、それを感じさせないくらいたくさんの植物が公園内に植えられていて、当時の人々が辛い状況下でもたくさんの努力をしてきたということが感じられました。

2日目、被爆者講話の時にこんなお話を聞きました。当時13歳だった中学校1年生の折免滋さんは、疎開先の作業現場で被爆しました。折免さんはその時即死状態だったそうです。その数分前、折免さんは家を出る時にお母さんからお弁当をもらいました。中身は、当時貴重だった白米。それを聞いた時、折免さんは言いました。「今日のお弁当、楽しみやね。」二人は喜びながら道を別れました。その後、原爆が落ちたのです。遺体のそばにおかれた弁当箱を見て、お母さんは泣き崩れたそうです。こんなことがあっていいのだろうか。私はこの話を聞いた時、直感的にそう思いました。もし自分が家族や友達と幸せを共有しているとき、突然上空から爆弾が落ちてきて自分の大切なものが全て失われてしまったら……。考えるだけで胸が苦しくなってしまいます。ですが、たった一発の爆弾でドラマのような悲劇があちらこちらで起こっていたのです。小さな幸せをも奪ってしまった原爆。私は原爆を許すことはできないと思いました。

3日目の碑めぐり講話。そこではたくさんの石碑をめぐりました。その中でも、「原爆の子の像」が印象に残っていました。この像は当時2歳で被爆し、その10年後に病気でなくなった佐々木禎子さんの同級生が平和への祈りを込めて、当時の全国の小中学生への募金を募り、完成した像です。小学生でその行動力はすごいなと思っていた時、ガイドの上野さんがこんなことをおっしゃっていました。「私たちは微力だが、無力ではない。」この言葉は毎年夏に行われる「高校生平和使節」のスローガンだそうです。私はこの言葉を、一人一人の持つ力は微力だが人が集まれば大きな力となる、というふうに解釈しました。平和の実現に大切なのは一人一人が平和の意識を持つことだと、この碑めぐり講話を通して思いました。

今日はもう来ない

豊葉の杜学園　菊地　慧琉

登校の時間、「今日も学校か。」と毎日思いながら歩く。

だが、中学生広島平和使節派遣に赴くと、私の中で意識が変わった。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、これは子が学校に行く、父が仕事に行く、母が家事をする、そんな時間だと思う。この時に、人類史上初、広島に原子爆弾が投下された。あたり一面に青白い熱線、放射線が降り注いだ。体は火傷を負い、約 3000 ～ 4000℃近くの熱さ、水を求める人々で街は溢れかえっていた。現時点で原子爆弾が原因で亡くなった方は約 14 万人と言われている。たった 1 つの原子爆弾で、世界で一つしかない命、当たり前の生活が一瞬にして消えたのだ。

私が強く印象に残ったのは、原爆投下前の母親が子供にお弁当箱を持たせた時のお話だ。当時はお米が高価なもので配給制度が行われていた。そんな時代の中、母親は受け取ったお米を子供のお弁当に入れて持たせたそうだ。子供は「今日のお弁当が楽しみだな。」と言って家を出た。その数十分後に、原爆が投下された。原爆で焼かれた黒いお弁当は、今でも広島資料館に展示されている。

私は、この話を見聞きして、母はいつも子のことを思っていたのに、このような形で会えなくなってしまったことに心が傷んだ。この出来事で、私はいつ何が起こるのかわからないと改めて実感した。

突然だが、「いじめ」「暴言」と聞いて何を思うか。

私も含め、良い印象は持たない。誰しも馬が合わない子がいると思うが、一人一人の個性や性格があり、相手を尊重し認め合う必要がある。

戦争も同じような理由でおこると思っている。

最初は難しいことだと思うが、少しずつ認め合っていくことが大切だと思う。

また、学校に行けるということは、当たり前のことだけど当たり前のことじゃないという事を感じてほしい。被爆者の方が、被爆後は外で地面の上に座って、授業を受けていたと話をしてくれた。今私たちが室内で授業を受けられることや、友達と会話できること、これも全て当たり前のことじゃない。

また、家族の日常もそうで、衣食住ができていること、他愛もない会話ができること、これはどんなことよりも幸せなことだと私は思う。

今日はもう一生来ない日で、丸一日同じ日なんてない。だから、一日一日を大切に、後悔しない一日を過ごしていきたいと思った。

貴重な体験をし、今の私は登校の時間、「今日も学校を楽しもう。」と思いながら歩く。

二泊三日で学んだことを活かして、後悔のない一日に。

4. 被爆者講話

被爆者講話

髙品　健二　氏

【髙品氏】今日は平和公園に警察官とか、いっぱい人が出ていて、普通の日より10倍ぐらいの人出になっております。いつもあんなことない。割とゆっくりした中で見られるんですけど、今日は8月6日で、特別の日でね、そして全国放送も入っていますので、みんな張り切って放送に協力しているんです。

皆さんが昨日今日、公園に行って、どういうふうなことを思われたかなと思うんです。戦時中は、そこに地図にありますけど、あの公園はこの真ん中の島になっているね。たくさんの民家が建ち並んでいた。そして、資料館のところの反対側にはお寺が2軒あったんです。お寺もお墓もあったし、割と人出の多い場所でした。

8月6日の日、どういうふうに広島の街は変わっていったかなというと、それまでは空襲も、空襲警報は出るけど、たまに艦載機が来て、米軍の飛行機、戦闘機が来て、そして機銃掃射って分かるかな。飛行機から鉄砲の弾撃って、ダダダッ、ダダダッ、ダダダッ、そういうふうなことがあることはあった。だけど、割と原爆が落ちるまでは、まあまあ静かな街並みだったんです。

で、なぜ広島に原爆を落としたかというと、米軍の資料によると、3か所ぐらい候補に挙がっていたみたいで、8月6日の原爆を落とす一番都合のいい気象情報が広島にあった。福岡とか、そういうところも候補にあったけど、広島に落とした。

原爆は3機のB－29で広島へ入ってきているんです。大体ね、9,000メートルぐらいの高度を取って広島の街に来て、そして、広島の街の上空へ来たときに、600メートルで原爆を破裂させるような爆弾にセットしてあって、それで3編隊で東広島のほうから入ってきて、そして、約9,000メートルの高さで原爆を落とすんです。そして、原爆を落とした飛行機は、日本海側、松江のほうへ向かって全速力で退避していく。それはなぜかというと、8月6日の広島に原爆を落とす1か月前に、アリゾナ州の砂漠で広島型と、そして長崎型の2つの爆弾の実験を1回しているんです。ところが、その実験で作った、落とす本人たちの、米軍たちの思わない威力の大きさでびっくりしている。そして、これから落として破裂させたら、自分たちの飛行機も巻き添えになるということで、規模をちょっと小さくして、広島の上空に来たときに落とした。9,000メートルぐらいの高さで落とす。その8月6日が気象上で一番原爆が破裂して被害が大きくなるような気象が広島市になる。それで落とした。

で、落としたB－29はどこへ行ったかというと、日本海のほうへ向けて、ぐーっと避難していくんです。そして1機だけ途中で

避難をやめて、原爆が破裂した後の市内の状況を一応確認するために、そういうふうなことをした。

そして、米軍の写真が事務所というか、被団協のほうへ行くとあったんですけど、恐らく、皆さん気がついてないと思う。これは仕方がない。前もって、それだけのことをどこかから耳に入れておかないと、ね。

これも余談やけど、あの資料館のいろいろな遺品を並べている中で、黒く焼けた弁当箱が、ただ、こうして弁当箱を置いてあるから、何が何やらさっぱり分からん。その弁当箱を、いろいろなことを聞くと、なるほどな、これを持たせたお母さんは、どんな気持ちで、その朝、子供に弁当箱のお弁当を詰めて渡したんかなということが分かる。

それはどんなことかっていうと、その当時は、もう日本の国は配給制度で、なかなかもうお米の配給の中で分かって、世間ではお米の御飯を食べるということは、その当時は、もう難しかった。代用食というか、秋になったらサツマイモ、春になったらジャガイモを掘ってジャガイモ、そのようなものを食料品として配給していたんです。

で、8月6日の日の、その黒い弁当箱はお母さんが久しぶりに御飯を炊いたから、今日のお昼は弁当やでと言って、弁当を詰めて、子供に渡して、そして、家の角を曲がるときに、その子供が、どんなことを言うたか。お母ちゃん、今日のお昼、楽しみやねっていう、おいしい御飯食べられるねっていう、手を振って別れたって。ね。

それから、あと何分もたたないうちに、その子が通っている中学の集合場所で、ほとんど全員亡くなっている。そして、死体は、もう死体処理班の兵隊さんが持ってって、その弁当箱だけそこにあったって言うて、お母さんが泣き崩れておられました。だからね、せんべい、たばこ一つにしても、そういう悲しい物語があるんやなということを、私は皆さんの耳にちょっと入れておきたい。

で、私は実は4月から広島からちょっと離れた、30キロぐらい離れた田舎に三次という街があるんです。山の中にね。その山の中に私の学校の生徒は集団疎開っていうて、あまり耳にしたことないでしょう。集団疎開というのは、クラスの中のほとんどの子と一緒にお寺の本堂を借りて、そこへ集団で避難して、戦争があるから、空襲があったときに子供たちだけでも助けてやりたいということで、日本の政府はそういうふうなことをして、それで私の学校もそういうこと。それで私たちは1クラスで30人、40人ぐらいのクラスやった。そのクラスで、その本堂を貸し切って、4月からそこで生活をしていた。そして6年生の上級生のお姉さんが、子供たちのお母さん代わりで1人ずつ、私たち3年生の子供の面倒を見てくれると、そんな学校生活でした。

それで私は、母親が体の調子を崩していた。それで私の祖母が集団疎開しているところに迎えに来てくれていた。だけど、皆の前では、それは言えなかった。ただ、ちょっと用事があるから、高品だけはちょっとと言って、うちへ帰すからということを皆に言うて、

そして私はここから、中心地から 2.5 キロ離れた出汐という街へ母親を診に帰っていたんです。

で、その朝は比較的静かな朝で、原爆の落ちるような、静かな朝っていうても、B－29 はしょっちゅう飛んでくる。飛んでくるけど、B－29 がまさか原爆を落とすとも思わないし、普段そういうことがなかったから。

そして、朝起きて空襲警報も解除されるし、私は友達を求めて家から出て、防火用水のそばまで行った。

防火用水って分かるかな。分かる？　防火用水のそばまで行って、そして、各家には 1 つずつ、セメントで作った水をためる防火用水が、どこの家でも玄関先に置いてあって、それから町内には、それを 10 も 15 も集めた大きな防火用水を作って、そこにいつも水をためていたんです。そこはなぜかっていうと、米軍が考えた空襲の中で、焼夷爆弾という爆弾を開発しているんです。それはどんな爆弾かというと、日本の家屋、木造家屋に適した爆弾だ。それが落ちて破裂すると、中にゼリー状の火薬が入っている。それで、破裂すると同時に、そのゼリー状のもんに火がついて、べたっと、こういうところに貼りついて、壁に貼りついても決して落とすことができない、そういうふうなものを米軍は開発して、そして日本の爆撃に使っていたんですね。

そして、その朝もそういう爆弾を落とされて、で、原爆を落とされたけど、普通の爆弾と同じぐらいのことしか受けるほうは考えてなかった。まさか原爆が、核爆弾が破裂するなんて、夢にも思ってなかった。

日本でも、何か、核爆弾を開発しようっていうことまではいったみたいです。皆さん、知ってるかな。長崎医大の永井博士、「長崎の鐘」っていう映画にもなったし、本にもね。だけど、皆さんの耳には、目には、それは見てないと思う。永井隆博士っていうのが、そのグループが原爆のちょっと足元までいっていたんです。だけど、それを作って兵器として落とすというところまでは考えてなかった。だから、どこかの国がそれを開発するんと違うかな、というようなことを薄々感じてたみたい。だけど、まさかそういう爆弾を使って日本が攻撃を受けるようなことは、まずないだろうと、その当時は当然かも分からんし、私らから言わすと、ちょっと甘い考えやったなというふうに思うんですね。だけど、日本の国もそういうところまでは開発ができていた。だけど、爆弾にして使用するところまではいってなかった。

で、アメリカはどうかっていうと、もうその核爆弾を作って、さっき言ったアリゾナ州の砂漠で長崎と広島型の爆弾を 1 回ずつ落としている。どういうものか。したら、やっぱり自分たちが考えている以上に威力があったみたいで、だから自分たちが助かるんやったら、これちょっと落として、ばっと破裂させたら、ちょっとやばいよというような感じになって、それで広島へ落としたわけ。広島か、そして、まあ長崎もそうやけど、ほかにも山口県のどこか 1 か所候補に挙がっていたんです。だけど、その日に一番気象情報に合うのが広島です。で、広島に約 9,000 メートルの高さで広島市内に入ってくるんです。そして落とすときは、それが 600 メートル上空で破裂するようにセットした。

その広島に落とした原爆が、どこの上で破裂したと思う？　ドームの上でもないし、あの相生橋の上でもないし、どこかっていうたら。分かりやすく言うと、ドームから直径に

して 200 メートルぐらいかな、離れたところ、今でもお医者さんがある、島医院。それで私はそこの院長さんに尋ねたことはないけど、今考えたら、今の院長先生の、恐らくおじいさんの代やったと。そのときに、やっぱりそこで開業してはって、今は立派な 7 階建てぐらいの高いビルになって、そして建物の横、裏から入ったら駐車場になって、その駐車場の横にモニュメントが立っていて、この上、上空 600 メートルで原爆が破裂したんですよ、というふうな説明書きがしてあります。だけど、ほとんど広島に来た子供たちは、そこまで知らないから、その場所に行く人は今でも少ない。もし時間があったら行ってごらん。原爆ドームから広島駅のほうに向かって、150 メートルないかも分からん、離れたところ。島医院というお医者さんがある。そこの駐車場の横にそういう説明書きがしたのを書いて貼ってある。だから時間があれば行ってごらんなさい。

で、そこで原爆は破裂するんですけど、破裂したら人間の体がどうなったか分かる？直接被爆した人は、私が 2.5 キロ離れたところやったけど、私は幸せなことにやけどはしておりません。ガラスの破片で顔の右側、今、割ときれいになってるけど、ガラスの破片でいっぱい傷がついてた。あれが目に当たってたら、もう駄目。目が見えなくなってたやろうなって。それで両脇の耳から、血が、だーっと噴き出してる。

ところが、原爆が落ちたときは、お医者さんにかかることができなかった。なぜかって、耳から血が流れたぐらいで死にはしないよっていうこと。だから、もう我慢せいと。で、私の耳は、そこで止まって、治るって言うたらおかしいけど、まあ、治った。だけど今でも耳が聞こえない。

それで一番困ったことは、就職のとき困った。初めて原爆を恨みました。耳がね、聞こえない。それで第 1 次の試験には通ってる。身体検査で落とされた。残念だったです。それで、もうこの広島におったらいかんわと思って、大阪の母方のおじを訪ねて、昭和 30 年、大阪に出て、そして、そこで何をしたかっていうと、理容師になりました。昼の学校へ 1 年間通って、インターンをして、2 年目で国家試験を受けて、そして合格した。だけどね、やっぱり好きな仕事でなかったから、結婚するまでは、ほんまに仕事に身が入らなかった。情けない話やけど。だけど、結婚して、おお、これはいかんでと思って、一生懸命するようになって、店も持つようになりました。

そして、これは今までのことは余分だったけど、原爆に遭って、そして、そういう耳になって、原爆に遭った人が、どんな格好をしたったか。資料館に行ったとき、恐らく資料館にもあまりこういうもんは出してないんです。それはなぜかっていうたら、子供がね、気持ちが悪いって言うんです、今の子。それで、今から 10 年ぐらい前までは、割と、見たら、あ、生々しい、気持ち悪いなというような服とか、今の弁当箱とか、そういうもんを見ていただくようになっていたけど、あるときにある学校の先生が事務所に行って、こ

んな話をされたんやそうで。原爆の資料館を見るのはいいけど、子供があの資料館を見たら御飯が食べられんようになったですよって、だから資料館の方も、そういうことを考えて、子供がそういうふうなことを考えないような資料館の資料の展示をしてほしいというようなことを言われて、資料館のほうも、ああ、そうか。時代の流れかなということで、あんまり気持ちの悪いような、血液がついたような弁当箱の焦げたのが転がっているようなのは展示するのをやめたみたいです。だけど、本当は、ああいうのも皆さんに見てほしいんです。だけど、そういうふうな苦情が入ると、やっぱりこれは控えておこうかなというふうになる。

で、日本の国では、京都と奈良県だけは戦争の被害を受けてないんです。あとの県は大なり小なり全部被害を受けている。

それで、広島に宇品っていう港があるでしょう。あの宇品っていうのは、陸軍の船が今の中国のほうへ日本の国の兵隊さんを送るときに送り出した、日本の陸軍のただ１か所の船が出た、出港したものが出たのが宇品なんだそうです。それが陸軍のそういう兵隊さんを中国へ送り出した。これ、あまり知られてないみたい。広島の人でも、えっていう感じだ。だけど、私は何かそういうことがちょこちょこ耳に入ってくるんで、そんで要らんことしゃべったらいかんかなと思うけど、やっぱりみんなにそういうことは耳に入れたい。みんなで、どういうふうに考えるかは皆さんの勝手じゃ。だから、耳に入れることは入れておく。

それで、今言ったように、陸軍の兵隊さんを送り出したのは広島の宇品港から。それで帰ってくるのは、いろいろなところへ帰ってきた。日本海側にどっかどっかと入ってきた。広島にも入ってきているけど、あれだけの人数を広島の宇品で一手に引き受けるということ、原爆を受けて焼け野原になった後だから、余計できなかったみたい。だから日本海側の大きな港に引揚者の受入先をつくってね。

それで日本の国でそういうことがあって、そして日本の国から満蒙開拓団という、こんな話、聞いたことないやろ。満蒙開拓団という、満州と蒙古と。日本の国は狭いし、人口が増えるからっていうことで、そこらの国の今の満州、中国の国を自分の国にする政策を取って、日本の国の次男さん、三男さんは、どんどん満蒙開拓団という名の元、中国やモンゴルへ送っていった。そして、私の友達も戦後に満州、中国から引き揚げて帰ってきました。

ところが、その満蒙開拓団の一つは、団長さんがちょっと変わった人やった。どんなことかっていうと、あんたらの土地を提供してくれ。そして一緒に食物を作ろうっていうような話をして、そして現地の中国の人と、そしてこっちから行った満蒙開拓団の人と一緒になって広い土地を耕して、そして作物が取れるような方法を現地の人に教えていった。そういう開拓団がある。それで、開拓団におったら、いや、もう、ここは日本の国の土地やから、あんたらは出てってくださいというような言葉で追い出していくようなところもあったみたい。だけど、私の友達は、そこで中国の人と一緒にジャガイモ作ったり、お米を作ったりして、そしていろいろな農作物を作って、そして、やっと軌道に乗ったところで敗戦。そして、日本の国へ帰らんといかん。で、そこの現地の人たちは、いろんなことを言った。今、日本に帰っても御飯も食べ

られないみたいやでって、ここで一緒に働いて、今までどおりの生活をしようよというような話もあったみたい。だけど、一応、日本人やから帰れるときに帰るよって言うて、どうしても帰るんかということで、うん、帰るということになった。分かった、それじゃあ、私たちが安全なところまで馬車に乗せて、あんたたちグループを送っていくって言うて、安全なところまで馬車に乗せて、そして送ってくれたそうです。今もその話を、その子はするんです。だけど、その子の前でこの話はできんから、名前も言われないし、壁に耳ありで。皆さんがどういうふうに感じるか分からないけん、それでも、こういう話、こういうことがあったよっていうことだけは、言っておく。

それで、やっぱりね、どこへ行っても、どんな人とでも、仲よくしておかないと、こういうグループができなかった。安全なとこまで馬車に乗せて、あんたたちを送っていくから安心しとけって言うて、4台ぐらいの馬車で安全なとこまで送っていって、そして、もし御飯が食べられんような状態やったら、また帰ってこいよ、あんたら受け入れるからということで、そこで別れた。

それで終戦後、日本も平和になり、中国も独立をしてとなったときに、その子は自分たちが住んでいた村へ訪ねていったそうです。3回か4回行っているんです。そしたらね、やっぱり覚えてる。覚えててくれて、よかったよ、話が通じたよって言うて。だから、どんな人でも、そうして親切にして、同じような境遇で生活をしていたら、そういう話が懐かしい話として語られる。だから皆さんも、今から生きていく中で、いろいろな人と出会いがあると思う。だけど、出会いがあっても毛嫌いせずに、お友達とはいかないかも分からんけど、お付き合いできるぐらいの話はしていかれたらどうかなと思うんですよ。

で、そういうふうな子が私の友達には、いてる。で、いろいろ考えたいこと、やはり言葉は通じなくても心が通じるということはね。みんなもこれから生きていく中で、いろいろな人と会って、話をせんといかん。それが外国の人か、どこか分からない。だけど、外国の人やったら外国の文化が自分の中に取り入れられるじゃない。だから、ああ、日本の文化とこういうところが違うんだなということ勉強できる。だからあまり毛嫌いせずに、ほどほどのところで、お友達になると。そうしたら変わった文化が自分の中に入ってくるよ。ちょっとずるい考えだけど。

で、今から皆さんが生きていく中で、広島ではこういうことがあった。だけど、こういうことがあったっていっても、なんぼあの当時の話を皆さんの前で話しても、何か虚しいときがある。去年、一昨年ぐらいから、それを感じるようになった。なぜかなっていうと、皆さんが若過ぎる。それで私はおじいさんになり過ぎて。だから、皆さんの若いとき生活をした日本の生活と私らが生活した日本の温度差がものすごいある。だからなんぼ僕らが、あの被爆したときはこうでしたよ、ああでした、御飯も食べられなかったですよ、何も、水もなかったですよ、いうようなこと言って

も皆さんの中に入らないんです。それはもう残念なことに、あるんです。

だから、私はいつも言うんです。語り部として出ていくけど、話は聞いていただけるけど、これでいいんかなっていうことが、いつも頭の、この２年ぐらい前から、それが大きくなった。だから、皆さんに話をして、僕が小さいときねって言って、何ですかって、御飯も食べられなかった。えっていう。なぜ食べられなかったかということをいくら話しても、頭の中にどういうふうにして浮かんでくるかということは分からないでしょう。幸せやから。だから、ものすごい落差があったままで、それじゃあ、これで体験談終わりますって言うて終わってしまう。そうしたら、ああ、これはこういう調子で、毎回こんな話をしていていいんかな。二、三年前から私はクエスチョンマークです。クエスチョンマーク。

でも、１つヒントがある。何かっていうと、あなたたちのおじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、まだ元気な方がおられるでしょう。近所にも、そういう方がおられる人がいてないかな。実は、こうこうこうで、学校でこういうふうなことをして、そして広島の資料館も見にも行って、その当時のことを見たっていうのは、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんたちの若いときは、戦争のときはどうやったって聞いてごらん。ちゃんとした話をしてくださると思う。それで、もし、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんがおられない人は、近所にそういう私みたいな人が１人や２人はいてはると思う。そうしたら、そこのおじいちゃん、おばあちゃんのとこへ行って、申し訳ないけど、今日は広島のほうへ旅行に行ってきて、資料館を見て、そして、その当時のいろんな話を聞きましたよ。うちの家はどうやったん？　それで、お宅の家はどうやったですかっていうふうなことを聞くと、案外、口を開いてくれると思う。口を開かないということは、それだけ、その人にはつらいことが多かったことやと思う。思い出したくない。だけど、皆さんがそういう気持ちでお願いしたら、ひょっとしたら、べらべらべらべら、私みたいにしゃべるかも分からん。それを黙って聞いて、今みたいに記録していったら、そして、後から、おじいちゃん、おばあちゃん、こうやったんやね、ああやったんやねって言うと、うん、そうよっていうことをやる。だから、これも一つの、ずるいかも分からんけれども、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんに戦争のことを聞く一つの方法かも分からん。ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんたちは、大体、おじいちゃん、おばあちゃんたちは、子供のとき、特に広島は世界初めての核爆弾をね、こういう状態になったけど、東京なんかでも、大阪なんかでも、名古屋でも、とにかく大きな都市は全部が爆撃されていた。特に瀬戸内は軍需工場が多いから、今はそうでもないけど、今ほとんどないけど、戦時中は船が入れるから、だから瀬戸内はずっと、あの調子で船が入っていて、そういう港があちらこちらにある。

呉なんかは広島と一緒。焼け野原になっているんです。街全体で。それはどんな方法かっていうと、呉に軍需工場がいっぱいあった。呉市内に。そしたら、呉の街は、飛行機から見たら、すり鉢をひっくり返したように、こういうふうに受けている、こういう格好になるんやそうです。だから米軍の爆撃するのに、外から爆弾をずーっと落として真ん中まで逃

げて来たときに、またそこへ爆弾を落とすというふうな爆撃の仕方をしているから犠牲者が非常に多い。だから、いろいろあって、あれこれあれこれ一遍に言うといかんけど、もう一遍、家に帰られて、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんに、戦時中はどうやったのって聞いてみてごらん。それで、あれこれあれこれ先にしゃべったら駄目だわ。どういうふうな生活をしてたん？　とか言うてね、語り部さんに聞いたんやけど、サツマイモ蒸かして食べてたん？　とか、そういうところぐらいで止めといたら、そうしたら、その次の答えは、おじいちゃん、おばあちゃんたちが一口しゃべり出したら、もう止まらなくなると思う。だから一遍、ずるいことを教えるけど、帰ったら、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが健在の人は、戦時中の食料がどうやったのとか聞いてごらん。それでもう、おじいちゃん、おばあちゃんがおられない方があるかも分からん。そういう方はお隣に誰かおられるかも分からん。近所におられるかも分からん。その人に、すいませんって言うて、広島へ行ったときに、語り部さんが、こんな話をされていたんですけど本当でしょうかというような話をして、そうしたら、そのおじいちゃんたちも、おばあちゃんたちも、いや、うちはこうやったよ、ああやったよって言って話をしてくれると思う。だから、一遍ね、ずるい考え方で、ちょっと自分たちでべらべらしゃべったりは、とにかくひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんたちにしゃべらせようねってして聞いたらいいと思いますね。

で、長くなったらいかんから、このぐらいにしときます。いろいろなことが、今日は資料館に行ってあったと思います。だけど、資料館で今出しているのは、私から言わせたら現実の10分の1ぐらいのものしか出してないです。あれ以上のもんがたくさんあるんです。だけど、それは出してないです。なぜかっていうと、私がさっき言うたように、御飯を食べられなくなる若い人がいるんです。それが若さなんです。だから自分のルーツ、御先祖さんで、あの戦争のときに、どういうふうな生活をしたかっていうのは、個々によって全部違うと思う。だから帰って資料館で見たことを、ぽっと忘れんうちに、おじいちゃん、おばあちゃんに聞いてごらん。何かいい話が出てくると思う。それがあなたたちの家の宝物になると。

今日はこのぐらいで終わりにしておきます。広島に来て、こういう街もあるんだなということ、皆さんの目で、体で味わって、そして帰ってください。今日はありがとう。失礼します。

《質疑応答》

【品川区立日野学園　遠矢】

被爆後、辛いことが多かったとよく資料館やテレビなどで見るんですが、その中でも笑顔になったことや幸せだと感じたことは何ですか。

【髙品氏】

原爆遭うて？　やっぱりね、その当時、悲

しいことが多かったけど、私が出会った人たちは笑顔でね、いろいろなことを話してくれた。やっぱりそれが一番うれしかったです。

【品川区立八潮学園　渡邊】

被爆後に、青空教室と呼ばれる屋根がない教室で勉強していたということをよく聞くんですけど、青空教室でどんなことを学びましたか。

【髙品】

青空教室はね、私たちが習ったのは、戦後、戦争が済んだ後、学校も焼けてるでしょう。だから、天気のいい日は外で勉強。黒板があれば黒板を持ってきて。だけど、青空教室は楽しいんですよ。外のいろんな空気の話が入ってくるから。それで勉強した人はたくさんいてます。

【一同】

ありがとうございました。

令和５年８月６日（日）
YMCA 国際文化センター

《被爆者講師プロフィール》

【氏名】髙品（たかしな）　健二（けんじ）

【被爆時年齢】８歳

【被爆時の状況】

爆心地から 2．5km の広島市出汐町の自宅そばで被爆。近所の男の子と２人で遊んでいて、しゃがんだ瞬間強烈な光と爆風に襲われ、右側のこめかみからあごにかけガラスが刺さった。

自宅にいた母も被爆。柱の下敷きになり胸を複雑骨折し、数日後には歯茎から出血、治療をうけられず８月 13 日 32 歳で亡くなった。

【被爆後】

原爆で母を亡くし､戦争で父も亡くし、一人で叔父の住む戸山村（現在安佐南区）に避難し、そこで学校を卒業しました。

しばらくして大阪に出て働き、2010（平成 22）年９月、広島に帰りました。大阪府茨木市に住んでいた時、小学校の教師になった次男のすすめもあり、被爆体験を話すようになりました。

5. 碑めぐり講話

日時：令和８月７日（月）

午前９時 00 分から 10 時 40 分

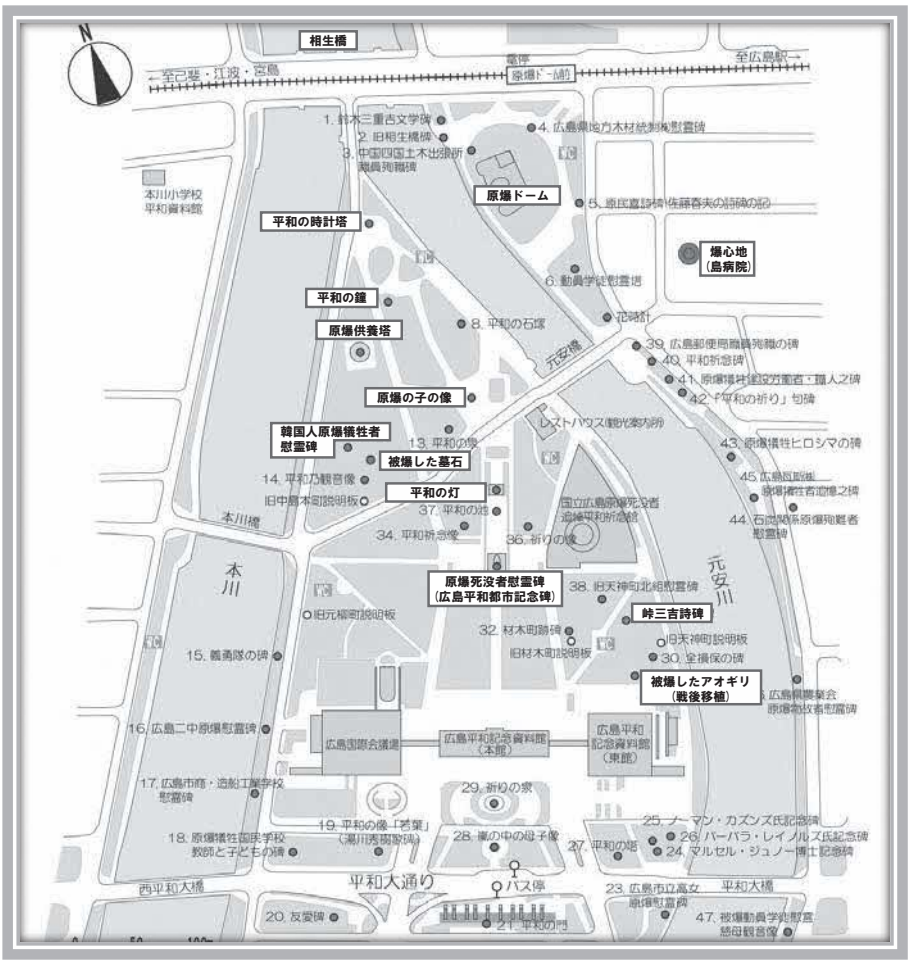
場所：平和記念公園内

講師：上野（うえの）　勢以子（せいこ）　氏

　　木原（きはら）　省治（しょうじ）　氏

　　寺本（てらもと）　真理子（まりこ）　氏

３つのグループに分かれ、講師の方によるガイドにあわせて平和記念公園内に設置されているさまざまな石碑や遺構などを見学しました。



主な見学場所

◆峠三吉詩碑

◆原爆死没者慰霊碑

◆韓国人原爆犠牲者慰霊碑

◆平和の鐘

◆被爆した墓石

◆被爆したアオギリ

◆原爆ドーム

《その他に見学した場所》

◆原爆供養塔

◆平和の灯

◆原爆の子の像

◆相生橋

◆平和の時計塔　　など

6. 成果報告

各中学校を代表して参加した 15 名の派遣生は、学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

東海中学校　　藤林　勇成

【日時・場所】令和 5 年 12 月 20 日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒・保護者

【発表の内容】

学習成果発表会にて PowerPoint で作成した資料を 10 分程度で以下の内容を発表した。

1. 導入

　日常が消えたらどうするかと問いかけ被害を述べる

2. 広島派遣について
3. 本題

　原爆ドームを見て→平和の灯火→記念平和資料館→式典→被害者講話を聴いて→碑巡り講話

4. 参加してみて
5. 勧誘

大崎中学校　　伊東　蒼馬

【日時・場所】令和 5 年 10 月 28 日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒および保護者　350 人

【発表の内容】

広島への原爆投下に関しての詳細をパワーポイントや映像を使い伝えたのち、広島で見聞きしたものについて話した。

平和記念資料館での生々しい苦しみの記録、国立広島原爆死没者追悼記念館で張られていた被害者と同じ 14 万枚ものタイル、原爆投下時のままの姿を残す原爆ドーム、平和記念式典への参列、被爆者の講話。そして今回の派遣を通じて自分自身が考えた平和について発表した。心の平和が何よりも大切であること。しかし、現在の日本では心の平和が必ずしも保たれていないことを皆さんにも考えてほしい。

浜川中学校　　飯村　多聞

【日時・場所】令和５年10月21日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒：333名

【発表の内容】

①広島派遣に応募した理由

４年前に姉が広島派遣に行き、話を聞く中で自分も行きたいと思った

②真の平和な世界とは

それぞれが感じる平和が共存できる世界が真の平和である

③原爆投下の詳細

1945年８月６日８時15分 原爆がもたらした惨劇

④原爆による後遺症　ケロイド

⑤復興

⑥広島平和記念式典　参列

外国からの来訪者、首脳や重鎮の参列、式典の流れ

⑦平和記念資料館、平和記念公園

⑧これからの時代を担う私たちにできること

鈴ヶ森中学校　　稲永　椎

【日時・場所】令和５年10月21日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒

【発表の内容】

しげるさんのお弁当の話（導入）

↓

３日間の報告

↓

- １日目…平和記念公園、原爆ドーム、資料館、原爆の子の像
- ２日目…式典、被爆者講話、灯ろう流し
- ３日目…碑めぐり講話

伝えたいこと

⇒人類は今、さまざまな危機（地球温暖化、貧困問題etc…）におわれている。

そんな中、私たちにできることは、戦争ではなく手を取り合うこと。

今、被爆者の平均年齢は85歳を超えた。私たちにバトンが渡される。そのためにも、ヒロシマ、ナガサキを知ろう。

事実と伝えたいことを絡ませながら、いかに戦争を知らない中学生の心に訴えられるか考えて発表した。

冨士見台中学校　　鈴木　莉子

【日時・場所】令和５年10月28日　体育館

【方法・対象】報告会　生徒・教職員・保護者：約250名

【発表の内容】

①パワーポイントを使い、以下のことを報告

・原爆の被害について、原爆による心情に着目した被害、広島派遣で訪れた建物紹介

②冨士見台中学校を爆心地としたときの図、クイズ

③今回の体験を通しての宣言

・唯一の被爆国に暮らす私たちにできること

荏原第一中学校　　小林　凛音

【日時・場所】令和５年10月21日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒

【発表の内容】

①原爆が落とされた日、死亡人数、被害の大きさなど写真を交えて説明

②身体的な被害（火傷、死の斑点など）と精神的な被害（差別など）について説明

③被爆者講話で聴いた経験を交えながら、文献などに書かれた被害者の声を紹介

被爆者講話の中で「今の生活はとてつもなく幸せ」だという言葉が心に残った。「学校に行くのが面倒くさいと思うことは幸せでわがままなことである」ということを全体に伝えた。

④私たちにできること

黙祷や授業で戦争について学びを深めるなど、私たちにもできるとはある。そして学んだことを次世代に繋いでいくことだ大切だと伝えた。

荏原第五中学校　　相川　瑞歩

【日時・場所】令和５年10月28日　体育館

【方法・対象】文化祭　全校生徒（300人）・保護者

【発表の内容】

①広島平和使節派遣の概要・日程の説明

②広島に投下された原子爆弾の説明

③被害を受けた人々に手記

④眼球にケガを負った少年の絵と写真

⑤放射線による後遺症

⑥ケロイド（やけどにより変質した皮膚）

⑦死亡した少女の弁当箱と、家族の手記

⑧平和記念公園のモニュメントについて

⑨広島平和使節派遣で学んだ意識と感想

荏原第六中学校　　蓮沼　美優

【日時・場所】令和５年10月21日　アリーナ

【方法・対象】報告会　生徒260名　保護者約100名

【発表の内容】

①広島派遣とは何か

②広島の原爆について、広島派遣で訪れた場所を写真を使って説明

③広島に行って学んだこと

「今の生活は平和であり決して当たり前ではないこと」

「命を大切にしてほしいということ」

「友達に優しくすること」が私たちにできる平和への第一歩ということを伝えた。

戸越台中学校　　愛甲　壮輔

【日時・場所】令和５年 10 月 21 日　体育館

【方法・対象】報告会　生徒約 300 人、保護者約 40 人

【発表の内容】

1. 挨拶
2. 広島平和使節派遣の概要
3. 派遣の志望動機
4. 原爆の被害
5. 派遣３日間での活動内容
6. 広島に行って学んだこと
   →人それぞれに平和があること
7. 私たちがこれから何をしていくべきか
   →自分なりの平和について考え、話し合う

日野学園　　遠矢　美海子

【日時・場所】令和５年 10 月 28 日　体育館

【方法・対象】文化祭　児童・生徒約 600 人

【発表の内容】

〈広島平和亜使節派遣を体験するという設定で〉

①広島平和使節派遣とは

②原爆の被害状況について

③原爆ドームについて（路面電車のエピソード）

④平和記念公園内について

⑤灯ろう流しについて

⑥折り鶴のリサイクル

⑦広島平和使節派遣を通して伝えたいこと

伊藤学園　　白鳥　妃菜

【日時・場所】令和５年10月20日　アリーナ１

【方法・対象】学芸発表会　５～９年児童生徒・教職員・保護者　約600名

【発表の内容】

①広島の被害

②伊藤学園を爆心地としたシミュレーション

③佐々木貞子さんの折り鶴の話

④派遣１日目の内容と、それについて感じたこと

⑤派遣２日目の内容と、それについて感じたこと

（主に平和記念式典と被爆者講話）

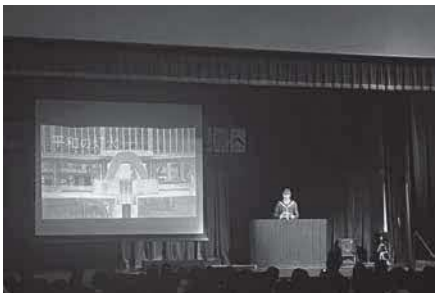
⑥派遣３日目の内容と、それについて感じたこと

（主に碑巡り講話）

⑦平和の灯について

⑧知ることの大切さ

⑨現在所有されている核の威力と危険性



八潮学園　　渡邊　栞

【日時・場所】令和５年10月28日　アリーナ

【方法・対象】報告会　児童・生徒（５～９年生）およびその保護者

【発表の内容】

①聞き手へ「平和とは何か」という問いかけ＋広島派遣を通して学んだこと

②広島派遣で訪れた場所の名前紹介

③自分の平和に対する考え方が変わる２つのきっかけについて

⇒平和式典について、被爆者講話について

④これから自分がしていきたいこと

これから私たちができること（広島派遣を通して考えた自分の意見）

荏原平塚学園　　長谷部　仁菜

【日時・場所】令和５年10月27・28日　体育館（アリーナ）

【方法・対象】報告会　全校生徒720人及び保護者約500人

【発表の内容】学習成果発表会　全校生徒720人及び保護者約500人

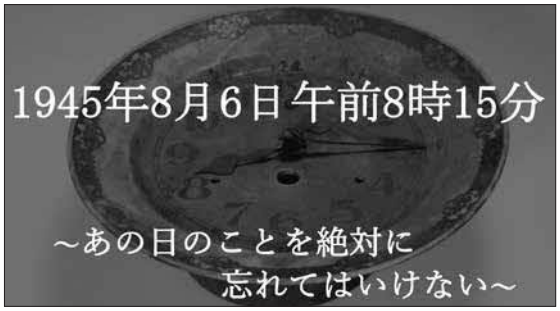
①導入（詞の説明など）

②原子爆弾による被害の説明

③被爆者講話を通して

④平和のためにできること

⑤まとめ



品川学園　　伊藤　瑞夏

【日時・場所】令和５年10月20日　アリーナ

【方法・対象】報告会　生徒（５～９年生）500人

【発表の内容】

①はじめに

聞いている人に「平和とは何か」という問いかけ

②広島１日目

原爆ドームの概要や平和記念公園で感じたことを資料やクイズで発表

③広島２日目

式典で感じた参加者それぞれの願い、灯ろう流しのそれぞれのメッセージを発表

④広島３日目

碑めぐり講話で聞いた碑に込められた当時の人々の想いを発表

⑤広島派遣を通して変わった平和への想い

「平和は一人一人の意識で作れる。だから自分にとっての“平和”とは何かを、考えてみてほしい」と伝えた。

豊葉の杜学園　　菊地　慧琉

【日時・場所】令和５年10月27・28日　体育館（アリーナ）

【方法・対象】報告会　生徒（7～9年生）及び保護者　約450人

【発表の内容】

①広島に行く前の、学校に対する想い

たまには休みたいな。勉強も大変だなという気持ち

②原爆の投下された瞬間の様子について

原爆、爆心地の説明、被爆後の景色など

③原爆ドームの説明

下には瓦礫があり、当時のまま残されている。平和の象徴として残している。

④子どものお弁当の謎

当たり前の日常が一瞬で奪われてしまった戦争の悲惨さを伝えた

⑤いじめや暴言はいけないこと、１日１日を大切にしよう

被爆者の方からの言葉を用いながら、平和とは何かを伝えた

第２部
青少年長崎平和使節派遣

1名体調不良のため欠席

●派遣生（左から）
三浦　こころ（高校生）
日高　神矢子（中学生）
松尾　航大　（中学生）
鈴木　昭之介（中学生）
山口　裕太　（大学生）
鈴木　アミナ（中学生）

●引率者
荏原第六中学校教諭　　川邊　泰葉
総務部総務課　　中村　誠

（敬称略）

1．行動日程表

令和５年度　青少年長崎平和使節派遣

※令和５年度は台風接近により長崎派遣が中止になったため、予定していた内容を記載

８月８日（火）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：45	集合・出発式・羽田空港へ移動	JR大井町駅
8：30～10：30	航空機搭乗（羽田空港～長崎空港）	
12：20～13：10	昼食	長崎市内
14：00～18：00	青少年ピースフォーラム 「被爆体験講話」 「被爆建造物等フィールドワーク」 「キャンドル作成」	平和会館ホール・平和公園周辺
19：15～20：15	夕食	長崎市内
20：30	ホテル着・一日のまとめ	ホテルモントレ長崎
22：00	就寝	

８月９日（水）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：15	集合・朝食	ホテルモントレ長崎
10：40～11：45	平和祈念式典参列	平和公園
12：30～13：30	昼食	長崎市内
14：00～16：00	青少年ピースフォーラム 「平和学習（意見交換）」	出島メッセ長崎
16：30～17：20	自主学習	平和公園周辺
17：20～18：20	長崎原爆資料館見学	長崎原爆資料館
19：15～20：15	夕食	長崎市内
20：30	ホテル着・一日のまとめ	ホテルモントレ長崎
22：00	就寝	

８月10日（木）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：30	集合・朝食	ホテルモントレ長崎
8：30～14：00	自主学習（昼食含む）	長崎市内
17：05～18：45	航空機搭乗（長崎空港～羽田空港）	
19：30	解散式・解散	JR大井町駅

「青少年ピースフォーラム」とは？

（主催：長崎市　運営：公益財団法人 長崎平和推進協会）

毎年８月９日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムでは、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となり、進行やフィールドワークの案内などを行っています。

◎事前打ち合わせ会・事後報告会

第１回事前打ち合わせ会　６月27日（火）

派遣生が事業の目的を理解し、より高い意識を持って長崎への派遣に臨めるよう、打ち合わせ会を実施しました。

(1) 派遣生自己紹介
(2) 非核平和都市品川宣言事業について
(3) 青少年長崎平和使節派遣について
(4) 長崎・原爆について
(5) 事前学習課題について
(6) 自主学習の検討
(7) 派遣日程や生活面・健康管理について

第２回事前打ち合わせ会　７月26日（水）

事前学習課題の発表、自主学習で見学したい場所・調べてみたいことについて意見交換を行い、派遣内容を決定しました。

(1) 事前学習課題の発表
(2) 自主学習の検討・決定
(3) 青少年ピースフォーラムについて
(4)「派遣のしおり」内容確認
(5) 派遣の諸注意事項について
(6) 折り鶴の提出

事後報告会　８月23日（水）

残念ながら長崎に行くことができなかったため、被爆体験動画の視聴をし、実際に被爆した方の状況や想いを聞いたほか、「平和」の実現に向けて自分ができることを考えるワークショップを行いました。

(1) 被爆証言動画の視聴
(2) ワークショップ
(3) 意見交換

2. 主な活動

令和５年度は台風６号の影響で、平和祈念式典の会場変更ほか、参列者を長崎市内の関係者のみに限定するなど、縮小開催での開催となった。各派遣生は派遣本番に向け、事前学習会を重ね準備を行ってきましたが、航空機が運休していることや、現地での安全面の確保が困難であることから、令和５年度青少年長崎平和使節派遣は中止となりました。

８月９日、同じく長崎派遣が中止となった都内近隣の３区（港区、千代田区、品川区）合同で、長崎で行う予定だった戦争の疑似体験ほか、平和祈念式典の視聴、派遣生同士でのグループワークなどを行いました。

（１）戦争の擬似体験

令和４年度の港区平和青年団としての派遣生として長崎のピースフォーラムに参加した片山さんが講師となり、実際に長崎で体験する予定であったプログラムを行いました。原爆投下時に人々がどんなことを見て聞いたか、また戦争中に失う人・もの・場所を実際に疑似体験しました。

説明する片山さん

戦争の疑似体験をしている様子

＜日高　神矢子＞

大切なものや人を書いたふせんを手放さなくてはいけない状況になったり、段々とふせんの数が減っていくのがとても怖いと思った。

そのときは疑似体験だったけど、もし本当だったらと考えたらいつ空襲に襲われるかわからない不安と、大切なものを失っていく恐怖が重なって、気が気でなかった。

この疑似体験のようなことが実際に起き、このような生活を本当に送った人達がいたことを考えると、とても胸が痛んだ。私が疑似体験を通して考えを深めることができたのは、戦時中の体験を伝えてくれた人達がいるからで「伝える・繋がる」ということの大切さを改めて実感した。

＜鈴木　アミナ＞

耳をふさいだとき広島、長崎で投下された原子爆弾の２つの原爆を模した２つの玉が落とされました。その次に今世界が保有する原爆、推定 12、520 発の原爆を模した玉が、次々に落とされました。日本に落とされた２つの原爆より威力は強くなり、保有国はチラつかせています。

次に、大切なもの・人・場所を出し合いました。母、父、弟、友達、いろんなものを書き出しました。もし戦争が起こったら男性のほとんどは徴兵され、父も連れていかれるのでしょう。きっと電気も使えなくなるでしょう。と、戦争になるとどうなるのか考えました。大切なもの・人・場所がどんどんなくなり、私は書いたものが全てなくなりました。

こんなことが現実で起こってはならない、防いでいかないといけないと再認識しました。

＜鈴木　昭之介＞

私は、疑似体験の最初に大切なものを言われて８つほどのものを思いつきましたが、爆撃や徴兵などを通して次々と失われていき、最終的には「自分の命」の１つだけしか残らなかったため、戦争の恐ろしさがよく分かった。

また、世界中で保有されている核爆弾の総数の玉をバケツに入れ、世界で保有している核爆弾の数を音で表した疑似体験は、とても分かりやすくその数の大きさに驚くとともに、やはり世界中で協力して核爆弾を減らしていかなければと思った。

そして、これらの体験をさせてくださったのが高校３年生の方であったため、若くしてこのような活動ができる行動力に憧れや尊敬の念を抱いた。

（２）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典の中継視聴

平和祈念式典の様子をライブ映像で視聴し、原爆が投下された 11 時２分に全員で黙とうを捧げました。

平和祈念式典を視聴している様子

黙とう

＜松尾　航大＞

LIVE 配信で長崎に原子爆弾が落とされた時刻である 11 時 2 分に「黙祷」を捧げました。この平和祈念式典は原爆犠牲者を慰霊し、あわせて世界恒久平和の実現を祈って挙行するものです。そしてこの平和祈念式典は、もうこのような犠牲者をつくらないためにやっているものでもあります。「もう被爆者をつくらない」というものは日本が戦争に対して掲げた最大の目標です。そして、LIVE 配信では当時の人の「なぜこんな目にあわなきゃいけないんだ」という理不尽な戦争に対して爆発した心。などを感じさせられました。

そして平和祈念式典が終わり僕はある言葉を思い出しました。それは「戦争をなくすには、人の心に平和の砦を築かなければいけない。」というユネスコ憲章で有名なアントニオ・グラーテスさんの言葉です。

戦争をするのは、人同士。人は平気で他人の命を奪える手段がたくさんある。だからこそ、より多くの人に平和の意識を植え付けないといけない。

＜鈴木　アミナ＞

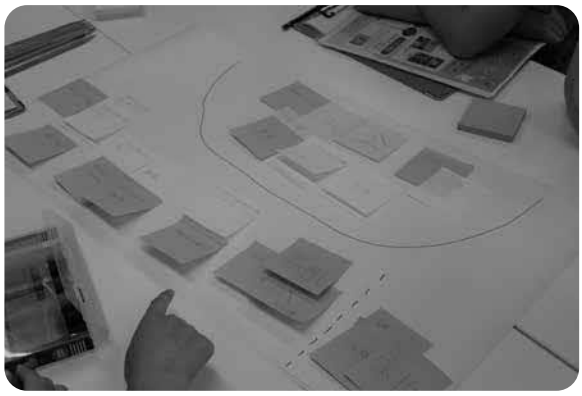
一つ一つの動作がリモートでしたが原爆を絶対になくし、平和な世界を目指すという思いが伝わってきました。岸田総理が話されているときにも周りの方々は真剣に聞いており戦争を起こしてはいけないという思いがしっかりと受け継がれているのだと感じました。

＜三浦　こころ＞

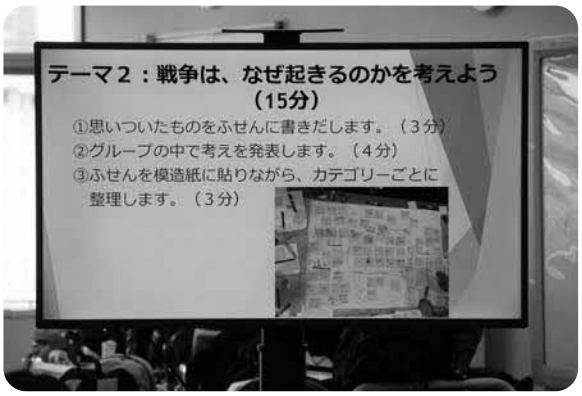
原爆が長崎に投下されてから 78 年を迎えます。戦争を知らない世代が増え、被爆者の平均年齢も 80 代と高齢になっている今、私の親世代そして私たち、次の世代に被爆者の思いや、戦争の悲惨さ、平和の尊さをしっかり伝えていくことが大切だと思いました。また、世界で唯一の被爆国である日本は原爆の悲惨さ、残酷さを世界に発信し続け、後世に伝えていくべきだと思いました。広島や長崎ほど平和のメッセージを示すのにふさわしい場所はありません。日本から力強いメッセージを発信し、核廃絶とはいかなくとも核兵器のない平和な世界の実現に向けた取り組みを行う必要があると思いました。長崎の思い、被爆者の思いを風化させない。それが私たちにできる第一歩だと思いました。

（3）グループワーク

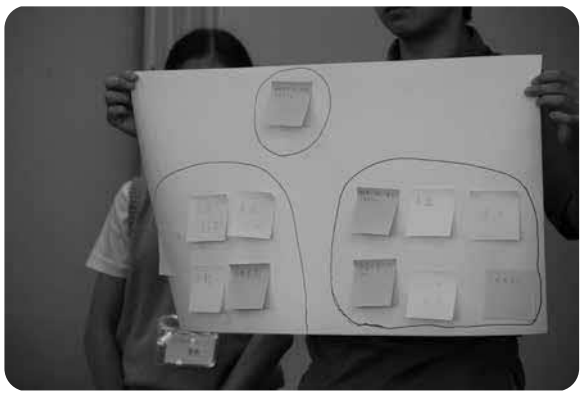
式典視聴後、グループに分かれて「戦争は、なぜ起きるのか」「戦争をなくすために、どうしたらいいか」をテーマに、各グループで話し合い、最後にグループでまとめた意見を全体に発表しました。



グループワークの様子



グループワークのテーマ



発表の様子

＜日高　神矢子＞

グループでの話し合いや発表を通して戦争や争いをなくすのはとても難しいと痛感した。

特に印象に残っている意見は「核保有国があるから他の国は好き勝手に戦争できない」という意見で、私はこの意見に納得した部分がある。けれど、絶対的な脅威（核）を持つ国を恐れることで保たれる平和は本当に平和といえるのか自分の中で矛盾が生まれた。だからこそ核の危険性と平和の重要性を今一度理解する必要があると感じた。

また「戦争」は良くないことだという共通の認識を世界で持つという意見もすごく納得した。その意見を実現するためには「伝える」ことや「対話」が必要不可欠だと思った。

＜鈴木　昭之介＞

私は、グループワークの最初で戦争の起こる原因について考え、他の人の考えた原因と比べてみたところ、他の人と通ずるところはあるが違うところもあり、思いつきもしなかったことも発見できたため、戦争の原因は様々であるということに気がついた。

次に、それらの原因をなくすためにはどうするか考えた。その中で、国の資源をめぐっての戦争をなくす方法で、自分は「国を安定させる」ことだけを思いついていたが、意見交換で「公平な貿易」という方法が出たため、より具体的な方法があったことが印象に残った。　また、「共通の敵があると団結できる」という意見から「戦争を世界共通の敵にする」という意見が出て、難しそうだが実現できれば大きな１歩になるかもしれないと思った。

発表では、各グループで出た意見を聞き、原因とその対策のまとめ方の違いは様々であったが、自分のグループと同じところを見つけたときは、やはりその対策が重要なのだろうと思った。また自分のグループでは出なかった意見も知れたため、とても参考になった。

＜三浦　こころ＞

「戦争はなぜ起こるのか」「なぜ止められないのか」という例題に対してみんなの答えがだいたい一緒だったことから戦争が起こる原因はだいたい決まっていそうだなと思いました。また、グループごとに紙の使い方や回答がそれぞれ違って自分では思いつかないような意見が聞けてよかったです。自分はあまり意見をすぐに出せなかったので、次にこのような機会があったらスラスラ答えていきたいです。もし長崎に行けたら今回のお題をもう一度考えてみたいです。

＜松尾　航大＞

グループワークでは「戦争はどうして起こるのか？」「戦争をなくすためにはどうしたらいいのか？」というテーマについて話し合いました。グループで話し合いをしている最中にすごいと思ったところがありました。それは他の人が考えた意見を踏まえた上で自分はこうだと思う。といった、相手の考えを尊重して、新たな視野を広げていく。といった行動が１人１人当たり前のようにできていたことです。グループワークを通して、色んな人の視点を取り入れることで全員が生み出した「視点」を獲得することができました。

3. 感想文

なぜ原爆は長崎に落とされたのか

三浦　こころ

原爆が長崎に投下されてから78年を迎えます。戦争を知らない世代が増え、被爆者の平均年齢も80代と高齢になっている今、私の親世代、そして、私たち次の世代に被爆者の思いや、戦争の悲惨さ、平和の尊さをしっかり伝えていくことが大切ではないでしょうか。

1945年8月9日、長崎に原爆が投下されました。なぜ米軍は長崎を狙ったのでしょうか。そして、なぜ広島に続いて長崎に原爆を落とす必要があったのでしょうか。

長崎は、戦艦「武蔵」を建造した造船所や製鋼所、兵器製造工場などが集まる日本軍の重要都市でした。そのため、重要な軍事拠点を破壊し、太平洋戦争を続ける日本を早期に降伏させようと考えたことが一つの理由とされています。原爆の投下目標とする都市は何度も変わりましたが、最終的に、広島と長崎になりました。広島には45年8月6日に原爆が投下され、人類史上初めて核兵器が実戦で使用されました。

原爆は長崎の上空約500メートルで爆発し、巨大な火の玉が生まれました。街は火の玉から放たれた熱線で、鉄が溶ける温度の倍以上に当たる3000から4000度の高熱となり、秒速数百メートルの爆風に襲われました。民家は跡形もなく破壊され、コンクリートで造られた頑丈な建物も崩壊しました。原爆は、大量の放射線も放出しました。熱線や爆風の被害を免れて生き残った人たちも、白血病やがんなどで次々と命を落としました。長崎市の当時の推定人口約24万人に対し、約7万4000人が亡くなりました。多くの一般市民を殺傷する爆弾を2度も落とす必要が本当にあったのでしょうか。

戦後の長崎は、平和の発信拠点としての街づくりが進められました。原爆が爆発した爆心地やその周辺には、緑豊かな公園が整備され「平和祈念像」が造られました。毎年8月9日には、像の前で平和祈念式典開かれ、被爆者ら市民が参列して、長崎市長が「平和宣言」を読み上げます。今回は、台風6号の影響で派遣が中止となり、長崎へ行くことは叶いませんでしたが、モニター越しに長崎の思いが伝わりました。

世界では、今なお多くの紛争や戦争が起きています。また、1万発以上もの核弾頭が世界中で保有されています。核兵器の廃絶を求める長崎の思いと、世界の現実には大きな隔たりがあります。ロシアのプーチン大統領がウクライナへの侵攻時に核兵器の使用を示唆し、世界に緊張が走りました。核兵器の使用がもたらす悲惨さを直接知る被爆者が年々減少する中、長崎の声を世界にどう伝えていくのかが課題となっています。世界で唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さ、残酷さを世界へ発信し続け、後世に伝えていく使命があります。長崎ほど、平和へのメッセージを示すのにふさわしい場所はありません。日本から力強いメッセージを世界に発信し、核兵器のない平和な世界の実現に向けた取り組みを行う必要があります。長崎の思い、被爆者の思いを風化させない。それが、私たちにできる第一歩ではないでしょうか。

平和と対話の重要性

日髙 神矢子

私にとってこの平和学習は多くのことを学び、得ることができたかけがえのない体験に

なりました。

私はこれまで、戦争を知ることを避けていました。知ること自体がとても怖く、私が戦争がどれだけ酷いものかを知ったところで何も変わらないと思っていたのです。戦争に対しての考えが変わったきっかけは、学校での授業や映画などの些細なことでした。それが今ではこのようなことに繋がり、形に残すことができて本当に良かったと思います。私が平和学習から学んだことと得たことは少しベクトルが違っています。

まず、第一に学んだことは「戦争を忘れてはいけない」ということです。当たり前と思うかもしれませんが、平和について学ぶ前と後ではこの言葉の重みが違うと感じるのです。よく学びよく考えたからこそ、この言葉がどれほどの重みを帯びているかが理解できました。だからこそ私たちは、「戦争を忘れない」と軽々しく言うことは許されないと強く思います。

また、ワークショップで特に印象に残っているのは戦争の擬似体験です。警報の音声が流れるたびに、自分の大切なものを書いた付箋が段々と減っていったり、手放さなければいけない状況に追いこまれていくことに恐怖や不安を覚えました。同時に私が擬似体験で感じた以上の恐怖を、78 年前のここ日本で実際に感じた人たちがいることに胸が締め付けられました。さらに当時は大切なものや人だけでなく、自分の命でさえもいつ亡くしてしまうかわからない状況で、その当時の人たちの心緒を想像すると言葉が出ませんでした。擬似体験を通して自分と向き合うと、被爆の過去がある日本で、当たり前のように安逸をむさぼりながら生活している自分を情けなく思いました。戦争や原爆がいかに酷かったものか「知る」ことしかできない私たちが、その事実を風化してしまっていることを痛感しました。

擬似体験の他にはグループワークも自分の考えを深められた機会になりました。話し合ったテーマは大きく分けて「戦争に対するイメージ」と「戦争や争いをなくすためにどうすればいいか」の二つでした。「戦争に対するイメージ」は、グループの全員が同じようなイメージを持っていましたが、「戦争や争いをなくすためにどうすればいいか」の話し合いでは全員が同じ考え方を持っていなかったことに驚きました。その中でも賛否両論があったのは、「核保有の下の平和」についてです。これは、「核を絶対的な権力又は威嚇として保持する国があることで、その報復に対する恐怖から成立する平和」といった内容の意見でした。

私はこの意見に納得してしまった部分がありました。実際に今の世界では核保有の下で保たれている平和が存在しているでしょう。日本も例外ではないと感じます。

ですが、やはりそのような平和は本当に平和と言えないと思いました。それは、講話や擬似体験で私が感じた気持ちの全てが本物だったからです。講話で思わず耳を塞ぎたくなったことや、擬似体験で感じた恐怖は、核保有の下でなかったことにはできません。ましてや、世界で唯一の戦争被爆国である日本がそれを許してしまったら、78 年前のヒバクシャの御霊は 2 度と報われません。広島や長崎の負の遺産は何の意味も持たなくなるでしょう。

けれども、私はこの意見が間違いではないと思います。対話の中でその意見が出た理由を理解することができて、納得した部分があるからです。その意見に対して賛成でも、反対でも、どちらでもなくても、考えを持つことに不正解はないと平和学習全体を通して感じました。それには対話の重要性も関係しています。

様々な意見があることから、対話が生まれ

ます。また、対話は違う意見を分かり合えるための手段でもあります。たとえ、対話を重ねても分かり合うことができなくても、そこから得られるものがあり、これは確信を持って言えます。沢山の人が様々な意見に触れ、自分の考えを持ったり、深めたりすることは平和に繋がっていると思います。私がそうであったように、考えることは行動に繋がり、行動は結果をもたらします。伝えることは、お話を受け取るだけでは成立しないし、繋げることは対話がないと不可能です。何事にも対話は必要不可欠で、対話は、平和への鍵であり、可能性であるのです。

私は今後対話の重要性を踏まえ、意見の表面的なところだけを見るのではなく、対話を通し考えていきたいと思います。これが私が平和学習で学んだことであって、対話と平和のつながりです。

一日、一日の美しさ

松尾　航大

僕達はいつもおいしいご飯を食べられたり住む場所があり、着る物もあります。そんな当たり前の日常を１日、１日かみしめながら生活することを僕達の間ではあまり意識できていません。1945年８月９日11時２分、たった１つの原子爆弾で当たり前の日常が壊された日常に一変してしまうのです。

それから78年が経ちました。今でも、当たり前の日常がおびやかされている国があります。戦争は終わったのではありません。今も続いていることなのです。だからこそ、若い世代の僕達が戦争によってどれほどの恐怖や犠牲を生み出してしまったのか。ということを語り続けなければいけません。

僕達、品川区青少年長崎平和使節派遣生は長崎に台風が来ていたため残念ながら行けませんでした。僕は特に「大浦天主堂」に行けなかったのが悔しかったです。僕がなぜ、大浦天主堂に行きたかったのか。というと僕の学校はキリスト教で大浦天主堂も隠れキリシタンが造ったといわれています。ですから、キリスト教の学校にいるからこそ、原子爆弾を落とされた時の現状はどうなっていたのかしっかりとこの目で見てみたかったのです。調べてみると、大浦天主堂の場所は、長崎に原子爆弾が投下された場所から北東およそ五百メートル地点にありました。しかし大浦天主堂は倒壊し、信徒も約１万人、亡くなってしまった、と言われています。

こういう詳細を見ても、やはり、原子爆弾の恐ろしさは伝わってきます。こんな恐ろしい武器が未だ世界には何万個もあります。特にアメリカやロシアなどの大国が核を所有していて、どの国も核を捨てる気は一切ありません。こうなってくると世界から核を抹消するのは難しいです。そこで僕は考えました。核を無くすのは難しくても核を減らすのは可能なのではないか。そうするためには、核の恐ろしさをまだ伝わっていない国へと僕達が伝えるべきなのです。そうすることで深い相互理解を築き上げることができます。そうなってこそ本物の世界平和への一歩。につながるのはないでしょうか。

僕が長崎で行きたかった場所はもう一つあります。それは、「グラバー園」です。グラバー園とは、日本が開国した際に外国人商人であるグラバーさんの住まいです。僕が行きたかった理由としては、外国人の住まいが実際にその時どんな様子であったか、そしてグラバーさんが死ぬまでどんな生活をしていたのか歴史的背景と共に知りたかったからです。調べてみるとグラバーさんは、1838年に生まれて1911年に死亡しました。中の生活様式は洋風な雰囲気がしています。そしてグラバー園は今では観光公園として使われています。

僕は長崎に行けなかったことで学んだことはたくさんありました。中でも強く印象に残ったことは港区、千代田区、品川区の三区で行った意見交換会です。僕達のグループでは、皆さんしっかりとした根拠を持ちつつ話していました。その瞬間、僕は「こんなにも他区の人達はレベルが高いのか。」と感嘆してしまいました。グループで話し合いが盛んになるにつれて、僕は悟りました。「ああ。協力するってこんなにも清々しいことなんだ。」と。話し合いをすることによって、もちろん「考えが深まる」という結果を手にすることが出来ますが、それだけではありません。「相手の真意」が視えてくるのです。これは世界平和への鍵となる、と僕は考えております。敵国との対談をしていたら、段々と相手の正義が見えてきはじめ、思っていた敵国のイメージとは話し合うことで異なっているはずです。話し合いは多様な能力を授けてくれます。しかし、話し合いばかりに頼ってばかりではいけません。きちんと自分で解決できそうな問題は自分で対処をしてそれで、できなさそうだったら、やっと話し合いができるのです。話し合いは世界を救えます。しかし、世界は救えても、自分達の身近な平和を守る為には話し合いだけでは足りないと思います。なぜなら１人１人、色々な悩みを持っているはずです。では、どうしたら解決できるのか。というと「発信力」というものが必要になってくると思います。この発信力を行使することで、例えば、いじめられている人がいたとして、その人の気持ちについて聞いて、色々な人にいじめられている人の気持ちを発表する。ということができたりします。発信力は身近な平和を守ってくれます。だからこそ、これからも発信力の必要さを忘れてはいけません。それができてこそ、立派な派遣生と言えるのではないでしょうか。僕は、次の派遣生となる覚悟はできています。来年こそは、長崎に行きたいです。

派遣事業で確立した、自分が思う平和への道

鈴木　昭之介

私は、この派遣の募集の件を聞いた時、「被爆者の体験談をよく聞き、原爆や戦争の凄惨さを知るのと同時に、そこからお話ししてくださる被爆者の方々の原爆や戦争、平和への思いなどを知り、自分の考えをまとめることへの参考にしたい」という思いで応募を決意しました。

また、今回の派遣は、台風の影響により、現地の長崎へは向かえませんでしたが、品川区役所の職員の皆様、そしてボランティアとして関わってくださった皆様のおかげで、代替事業を通して実際の派遣に匹敵するほどの貴重な体験を得られたと思います。

よって、そんな活動での体験や自分で調べたことなどから、自分なりの平和への考えについて述べていこうと思います。

まず最初に、ボランティアとして協力してくださった高校三年生の方から、戦争や原爆によって、人々の大切なものがどのように奪われていくのかの疑似体験をさせてもらいました。

私は、大切なものを人、もの、場所に分けて挙げましたが、被害が進むにつれて減っていき、残ったものは唯一自分の命だけでした。しかしこれさえも失う可能性が高いため、改めて戦争の凄惨さを知るとともに、そうしてすべてを失い生き残った人々の気持ちを考えるとゾッとしました。

また、そのとき協力してくださった方には、高校三年生という若さでこのような活動ができるということに驚きつつ、強く憧れをもちました。

そして代替事業のプログラムの最後のグ

ループワークでは、戦争の起こる原因について考えた後、それを踏まえて戦争を防ぐにはどうするかについて意見を交換しました。この中で一番印象に残ったのは、宗教や政治思想などの対立によっておこる戦争について、それを防ぐためには、互いの考えや目的を否定するのではなく、よく理解してどこか折り合いをつけられないか探ることが重要だという意見でした。その防ぎ方であれば、それぞれの宗教の教徒や政治思想の支持者の望まないことが最小限で平等になると思ったからです。

そのほかにも、自分と同じだった意見や異なる意見、思いつきもしなかった意見などがたくさん飛び交ったため、非常に参考になりました。

派遣事業の最後の事後連絡会にて、もう一度ワークショップと意見交換をする場がありました。ここでは、戦争に限らず、身近なところでの平和を保つにはどうすればよいかについて話し合いました。そのなかで、常に相手の気持ちを考えながら行動すればトラブルは防げるだろうという意見がありました。この意見を聞いた時、その意見と代替事業のグループワークで聞いた意見が結びつき、自分の中で平和を守るための方法として最も簡潔で効果的だと思う意見が確立されました。それは、「国際的なことであれ身近なことであれ、相手の気持ちや目的、考えなどをよく考え、自分との折り合いをつけてから最適だと思ったことを行動することが重要である」ということです。そうすれば、関わる人たち全員が最も平等に利益を被ることができると思ったからです。

私はこの派遣事業に応募してから、前述の通り「被爆者の声を聴いて彼らの平和への思いまで汲み取り、自分の平和観への参考にしたい」という思いを持っていたため、事後連絡会の後、被爆者たちの体験談を調べました。その体験談たちから読み取れたことは、現在の私たちの生活は、戦時中に比べればはるかに幸せであることを忘れて欲しくないという気持ちでした。もしそのことを世界中が忘れなければ、戦争を二度と繰り返してはならないという認識が広がり、少しでも戦争を食い止めることができると思ったため、このことが重要だと考えました。

以上のことより、戦争に限らず身近な問題をも防ぐ手段として「相手の気持ちや目的、考えなどをよく考え、自分との折り合いをつけてから最適だと思ったことを行動する」ことが重要であり、戦争を防ぐためには「現在の私たちの生活は、戦時中に比べればはるかに幸せであることを忘れない」ことが重要であると私は考え、これを平和への自分なりの考えとしようと思います。

最後に、品川区役所やボランティアの方々のおかげで、大変貴重な経験をさせていただいたことを重ねて感謝申し上げます。。

「長崎平和使節を通じて考えた平和について」

山口　裕太

品川区平和使節団で、長崎平和祈念式典への参加させていただけることとなり、現地へ赴き多くのことを学ばせていただける貴重な機会をいただけたことに感謝しておりました。しかし、台風の影響で、中止となってしまい非常に残念です。規模を縮小しての平和祈念式典の開催となりましたが、平和を祈る気持ちは、参列はできませんでしたが、強くなりました。当たり前のように今は平和な日常が過ごせておりますが、世界では、いまだ戦争が続いております。平和の尊さと、戦争の恐ろしさを、この派遣へ向けて改めて考えました。

一瞬で人々の平穏な日常を壊してしまった原爆の恐ろしさ。原爆が長崎に投下されてから７８年となりますが、いまだ核問題も解決

されておりません。忘却により新しい原爆肯定へと流れていくことが決してないように、核兵器のない平和な未来へ向けて、私たちが伝え続けなければならないと考えます。

長崎原爆について調べたことは、非常に重要な歴史的出来事についての理解が深まったという点です。長崎原爆は、第二次世界大戦中にアメリカ合衆国が日本に対して投下した原子爆弾の一つであり、1945 年 8 月 9 日に投下されました。この出来事は、数万人もの人々が即座に亡くなり、その後も放射線による健康被害や社会的影響が続きました。被爆者やその家族の物語、原爆の影響、そして被爆者とその家族が長年にわたって経験した苦しみについて考えました。この出来事から学ぶべき多くの教訓があります。核兵器の使用に伴う人道的な悲劇、戦争の恐ろしさ、そして平和を維持する必要性についての深い理解が得られました。同時に、核兵器の廃絶や国際的な協力の重要性についても考えさせられました。

長崎原爆は歴史的な決して繰り返されることがあってはならない出来事であると同時に、平和と核兵器廃絶を世界へ訴え続ける必要もあります。この出来事を忘れず、核兵器の使用を防ぐための努力を続けることが大切だと感じます。また、長崎原爆に関する情報を広めることも大切です。若い世代にこの歴史的出来事を風化させずに、核兵器の恐ろしさとその使用に伴う人道的な悲劇を伝えることが、未来の平和の確立に大切なことと感じました。核兵器に対する意識を高め、国際社会での核の廃絶を訴え続けることが、私たちの世代が続けていけなければいけない使命であると感じました。私たちの未来へ向けての責任を、核兵器の恐ろしさを理解し、平和を築くために私たちができることがあることを再確認しました。

原爆をなくし、平和を築くためには個人の意識と行動が不可欠です。残念ながら、今年は長崎の平和祈念式典に参加することができませんでしたが、核兵器のない世界を築くための努力と、平和のための希望を伝える場所である長崎平和祈念式典へ参加させていただきたいと強く感じました。世界中で平和を築くための努力が続けられ、核兵器の廃絶と紛争解決が進められることを願います。

最後の被爆地に

鈴木　アミナ

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分世界で二回目となる原子爆弾は長崎に落とされた。長崎だけでも約 7 万 4 千人が 1945 年末までに死亡したとされる。

私が長崎平和使節団に参加したきっかけは『ちいちゃんのかげおくり』という小学四年生の時に学習した戦争の物語だ。小さい女の子がこんなに早くいなくなるなんて小学四年生当時の私は思いもしなかったのだ。戦争が怖いものと初めてそこで分かったのだ。成長して歴史も学習していくうちに、その時どうやって生きて、どう思って生活していたのか何となくわかったような気がした。決め手となったのは『この世界の片隅に』だ。映画で絵を描くことが好きという共通点を見つけて少し嬉しいような気もした。肘から下を失っても目の前で姪が亡くなっても生きていこうとしていることに感動した。やっぱり知らなくてはならないのだ。原爆でたくさんの人が亡くなったことを。残された人々は後遺症などに苦しんでいたことを。そして差別され精神的な苦痛を日々耐えていたことを。決してこの過ちを繰り返してはならないと私はそう思った。初めにワークショップ体験の感想についての後、私は原爆に関して 2 つのことに注目して話す。

台風の影響で長崎に実際に行けなかったた

めワークショップに参加した。空襲警報の音を聞いたり、今どれ位の核を世界が保有しているのか耳で聞いたりした。心に残ったのは今戦争が起きたらと考えたことだった。男の人は戦争に行き、家はなくなり、学校は空襲でなくし、学校近くに住んでいる友達も手放し何も残らなくなってしまった。単純だが戦争は只々なくなって欲しいと思った。

１つ目は、ヒバクシャへの差別についてだ。当時被爆者は後遺症だけなく差別にも苦しんでいた。放射線による影響で髪の毛が抜け、ガラスが刺さり、すぐそばに異型の死体がうじゃうじゃとある生活が続き、本来助け合うはずだった同じ国民からの差別である。その心の痛みは計り知れない。それだけでなく広島と長崎の被爆者にも差別があったのだ。黒い雨が確認されなかったからヒバクシャと認めないと言った趣旨で政府から差別されていたのだ。被爆した事実でさえ認めて貰えなかったのだ。戦争がなければ、原爆がなければあの時謳歌していたかもしれない人生を容易くひとつの爆弾で消してしまったのだ。生まれてまもない赤ちゃん、育ち盛りの可愛い子供も、私と同い年くらいの子供、そのお母さん、戦争に行ったお父さんたち、おじいちゃんおばあちゃんまでもがみんな被害者だったのだ。

２つ目は、実際の長崎の被害だ。中心から500 メートルにあった民家は粉砕され、生物は生存が確認されなかった。樹木は中心から放射線状に倒壊。中心から 1000 メートル圏内木造の中学校の原型が無くなり鉄骨の原型が分からないほどぐにゃぐにゃとしていたそうだ。中心から 2000 メートル圏内直径 91 センチの椎の木は根元から倒れ、神社は原型をとどめず粉砕された。遊び途中だった制服姿の男の子二人が焼死しているのが発見された。被害こそ広島よりも少ないが使用された核は約 80 倍の威力だ。だが今では広島で落とされた核の 3000 倍以上の威力があるとされていてもっと大きな被害が予想される。人も思い出も全てなくなってしまうのだ。

現状今も核兵器の保有している国があり、その傘に守られている国もある。日本だってそうだ。だからこそではないのだろうか。核で保証される平和は本当に安全安心で笑顔で楽しく過ごせると言えるのだろうか？広島が世界で最初の被爆地であることに何があっても変わることは無い。ただ、長崎を最後の被爆地にすることは難しく、世界中の人々が協力し相手と話すことを徹底していくことが大切だと感じた。これをより多くの人に伝え続けるよう努力していきたいと思った。

4. 派遣をふり返って

〈鈴木　アミナ〉

改めて戦争を起こしてはならないと再認識することができました。学習し、理解して終わることなく、しっかり自分の考えを持ち、近く人からあの時生きていた人々の思いを受け継ぎ、伝えていこうと思いました。広島が世界で初めての被爆地であることは変わりません。長崎を世界で最後にする。戦争を起こしてはならない。このことを世界中の人がしっかりと知ることが大切だと思う。

〈松尾　航大〉

台風の影響によって残念ながら長崎には行けませんでしたが、長崎に行けなくても得られたものがあります。それは「日常の大切さ」です。おいしいご飯があること、平和な日常が毎日やってくるということは、どれだけ大切なのか、恵まれているのか。それが分かってこそ、真の平和への１歩ではないのでしょうか。

〈鈴木　昭之介〉

今回の活動で、疑似体験では戦争の恐ろしさ、グループワークでは戦争の原因や防ぎ方を学び、平和記念式典では被爆者への思いをはせることができた。

このように戦争について学んだり、考えたりすることは、この活動のようなものに参加しなければ難しいため、とても貴重な経験を得ることができた。

〈日高　神矢子〉

片山さんのお話で気づかされたことや、自分の考えを見つめなおした部分があり「伝えること・繋ぐこと」の大切さを実感した。グループワークでは、初対面でも平和を願う気持ちはみんな一緒で、それは伝えてくれた人達のおかげでもあるし、だからこそ私たちにできることは沢山あるなと感じた。

〈三浦　こころ〉

今回実際に長崎には行けなかったけれど、式典を LIVE 放送で見られてよかったです。私は小・中・高と被爆者の方の話を聞く機会がなかったので、とてもいい経験になりました。また過去は過去でしまっておくのではなく、過去の出来事、惨劇を見つめなおすことが大事だと思いました。

第３部　資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA　PEACE　MEMORIAL　CEREMONY

令和５年(2023年)８月６日

August 6, 2023

広　　島　　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims** Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式　　辞 広島市議会議長	8：03	**Address** Chairperson of the Hiroshima City Council
献　　花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来　賓	8：08	**Dedication of Flowers** Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**
平和宣言 広島市長	8：16	**Peace Declaration** Mayor of Hiroshima
放　　鳩		**Release of Doves**
平和への誓い こども代表	8：24	**Commitment to Peace** Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8：29	**Addresses** Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8：46	**Hiroshima Peace Song (chorus)**
閉　　式	8：50	**Closing**

平　和　宣　言

78年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時８歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていただきたい。あの日、熱線で灼(や)かれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみながら失われていった命。こうして失われた数え切れない多数の人々の命の重さを、この地で感じてもらいたい。」と訴えています。

本年５月のＧ７広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思います。また、慰霊碑を参拝された各国首脳に私から直接お伝えした碑文に込められた思い、すなわち、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和を祈念する「ヒロシマの心」は、皆さんの心に深く刻まれているものと思います。こうした中、Ｇ７で初めて「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとっての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てるべきであるとの前提で安全保障政策をとっているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視し、私たちを厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要があるのではないでしょうか。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっています。

かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーは、「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」との言葉を残しています。また、国連総会では、平和に焦点を当てた国連文書として「平和の文化に関する行動計画」が採択されています。今、起こっている戦争を一刻も早く終結させるためには、世界中の為政者が、こうした言葉や行動計画を踏まえて行動するとともに、私たちもそれに呼応して立ち上がる必要があります。

そのため、例えば、私たちが日常生活の中で言葉や国籍、信条や性別を超えて感動を分かち合える音楽や美術、スポーツなどに接し、あるいは参加して「夢や希望がある」といった気持ちになれるような社会環境を整えることが重要となります。皆さん、そうした社会環境を整えるために、世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。そうすれば、市民の支持を必要とする為政者は、必ずや市民と共に平和な世界に向けて行動するようになると確信しています。

広島市は、世界166か国・地域の8,200を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民レベルでの交流を通して「平和文化」を世界中に広めます。そして、平和を願う私たちの総意が為政者の心に届き、武力によらず平和を維持する国際社会が実現する環境を作ることを目指しています。また、被爆者の平和への思いを世界中の若者に知ってもらい、国境を越えて広め、次世代に引き継げるようにするために、被爆の実相に関する本市の取組をさらに拡充していきます。

各国の為政者には、Ｇ７広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一歩を踏み出すことを強く求めます。

日本政府には、被爆者を始めとする平和を願う国民の思いをしっかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年11月に開催される第２回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆78周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和５年（2023年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

みなさんにとって「平和」とは何ですか。
争いや戦争がないこと。
差別をせず、違いを認め合うこと。
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。
身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和20年（1945年）８月６日　午前８時15分。
耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。
子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。
たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」
仲間を失った私の曽祖父は、そう言って自分を責めました。
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、
生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから78年が経ちました。
今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。
「生き残ってくれてありがとう。」
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

私たちにもできることがあります。
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。
友だちのよいところを見つけること。
みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

令和５年（2023年）８月６日

こども代表
広島市立牛田小学校６年　勝岡英玲奈（かつおか えれな）
広島市立五日市東小学校６年　米廣　朋留（よねひろ ともる）

Commitment to Peace

August 6, 2023

What does peace mean to you?
No conflicts or wars.
Accepting differences without discrimination.
Everyone smiling without bad-mouthing others or fighting.
You can find many kinds of peace all around you.

8:15 am on August 6, 1945—
Ear-splitting explosions and skin-blistering heat.
Blood-covered corpses with skin hanging off their bodies float on the surface of the rivers.
A mother calling her child's name and pleading over and over again *open your eyes, just open your eyes!*
A single atomic bomb destroyed the city of Hiroshima in an instant and filled it with sorrow.

Why was I left alive?
Survivors guilt plagued my great-grandfather.
The atomic bomb left deep wounds in the hearts of those who survived,
and continued to bring them suffering for living.

It has been 78 years since that day.
Today, Hiroshima is a city full of greenery and smiling faces.
Thank you for surviving.
It's because you survived that we were given our lives.

And there is something that we can do for others, too.
Thinking about how others feel before saying how we feel.
Finding the good in our friends.
Doing what we can to make others smile.

Now is the time to unite our will for peace.
We will treat the ardent wish of the *hibakusha* as something personal and use our own words to convey that wish.
We will each take action to pay forward the peace around us.
We, the children of Hiroshima, will build a future that everyone can recognize as peaceful.

Children's Representatives:
Katsuoka Erena　(6th year, Hiroshima City Ushita Elementary School)
Yonehiro Tomoru (6th year, Hiroshima City Itsukaichi-Higashi Elementary School)

令和５年８月９日
August 9, 2023

被爆 78 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 78th Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening Address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１９	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

会場案内図…… 1ページ
司 会 者 名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3～4
長崎平和宣言…… 5～8
平和への誓い…… 9～10ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（歌）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13～14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15～18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長 崎 平 和 宣 言

「突然、背後から虹のような光が目に映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路に叩きつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべっとり付いてきました。３年７か月の病院生活、その内の１年９か月は背中一面大火傷のため、うつ伏せのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床擦れで骨まで腐りました。今でも胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨の間から心臓の動いているのが見えます。」

これは16歳で被爆し、背中に真っ赤な大火傷を負った谷口稜曄（すみてる）さんが語った体験です。

1945年８月９日午前11時２分、長崎の上空で炸裂した１発の原子爆弾により、その年のうちに７万４千人の命が奪われました。生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やがんなどを発症し、放射線の影響による苦しみや不安を今なお抱えています。

谷口さんは６年前にこの世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を遺しました。

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

長期化するウクライナ侵攻の中で、ロシアは核兵器による威嚇を続けています。他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。

今、私たちに何が必要なのでしょうか。

「78年前に原子雲の下で人間に何が起こったのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合うべきです。

今年５月のＧ７広島サミットでは、参加各国リーダーがそろって広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で世界に示しました。また、このサミットの成果文書である「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」では、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ということが再確認されました。

しかし、この広島ビジョンは、核兵器を持つことで自国の安全を守るという「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。核抑止に依存していては、核兵器のない世界を実現することはできません。私たちの安全を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしかないのです。

核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。

今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心に据えた安全保障の考えのもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

唯一の戦争被爆国の行動を世界が見つめています。核兵器廃絶への決意を明確に示すために、核兵器禁止条約の第２回締約国会議にオブザーバー参加し、一日も早く条約に署名・批准してください。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、朝鮮半島の非核化、北東アジア非核兵器地帯構想など、この地域の軍縮と緊張緩和に向けた外交努力を求めます。

地球に生きるすべての皆さん、一度立ち止まって、考えてみてください。

被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、78年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないでしょうか。

その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えました。被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかっています。

被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て、感じてください。そして、世界中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

被爆の実相を知ることが、核兵器のない世界への出発点であり、世界を変えていく原動力にもなり得るのです。

私は、両親ともに被爆者である被爆二世です。「長崎を最後の被爆地に」するため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来につないでいきます。

日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げるとともに、長崎は、広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、「平和の文化」を世界中に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2023年（令和５年）８月９日

長崎市長　**鈴　木　史　朗**

平 和 へ の 誓 い

78年前の８月９日、７才の私は爆心地から約３キロの片淵町の自宅で母や姉、弟２人の５人で食卓を囲んでいました。突然、強烈な閃光が走り、皆一斉に庭先の防空壕に駆け込んだ次の瞬間、地響きのような音がして私は母にしがみつきました。しばらくして壕を出てみると、縁側のガラス戸は跡形もなく壊れ、畳は跳ね上がり、食卓はひっくり返っていました。

その後、勤務先の造船所から帰宅した父は、爆心地に近い城山町の叔父の家に行き、二人の遺体を探し出し、焼け跡で荼毘に付しました。書斎の瓦礫の下にあった叔父の遺体も台所でみつかった叔母の遺体も無残に焼けていたそうです。

原爆投下直後、私たち家族は無事でしたが、被爆から10年余り経ち、次第に体調を崩していった父は肝臓がんと診断され、３か月程の闘病の末、亡くなりました。臨終の時、父の顔に酸素マスクを当てていた私は、「神様、私の家族をお守りください」という最期の言葉を聞き、涙が止まりませんでした。その後、母と姉、弟、そして被爆時、母の胎内にいた妹までもが、相次いでがんで亡くなりました。私自身も３年前、肺がんの手術を受けました。たった一発の原爆で、長崎ではおよそ７万４千人、広島では14万人が亡くなり、生き残った人々の多くも、今なお、様々な後遺症に苦しんでいます。

世界には、長崎や広島で使われた原爆の威力を大きく上回る核弾頭が約１万２千５百発存在し、ロシアのウクライナ侵略による緊迫した国際情勢の中、この美しい地球は、核兵器によって破壊され汚染される危機にさらされています。核戦争を起こさないために、唯一の戦争被爆国である日本は、今こそ広く世界に核兵器の非人道性を伝え、武力に拠らない平和創造の道筋を指し示し、地球と人類の未来を守るには、核兵器廃絶しかないと強く訴えるべきです。

私は、今から15年前の2008年の秋から４か月間、「第63回ピースボート地球一周の船旅」に参加し、船で世界一周をしながら自らの被爆体験を証言しました。そのとき同乗されていたカナダ在住のサーロー節子さんの力強い言動に鼓舞され、帰国後に被爆者団体の理事として様々な活動を始めました。

現在は、小学校などの平和学習の場で、被爆二世の方々と製作した紙芝居を使い、被爆体験の証言活動に取り組んでいます。これは長崎に原爆が投下された後、救援列車第一号に乗り込み、救護活動にあたった当時20歳の男性の体験をもとに製作したものです。紙芝居を見る純真な子どもたちの姿にふれるたび、私はこの子どもたちが戦争に巻き込まれ、私たちと同じ苦しみに遭うようなことがあってはならないと強く感じています。

今、我が国には、被爆者の願いをしっかりと受け止め、核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けて活動を続けている高校生がいます。高校生平和大使、高校生１万人署名活動をしている若者たちです。さらに私の住む熊本県では高校生が「ヒロシマ・ナガサキピースメッセンジャー・平和の種まきプロジェクト」と題して、同世代や下の世代に向けた平和学習の出前授業も行っています。

その若者たちの姿に勇気づけられ、私は未来への希望の光を感じています。放射能に汚染された灰色の世界ではなく、命輝く青い地球を次の世代に残すために、これからも力の限り、尽くしていくことを誓います。

2023年（令和５年）８月９日

被爆者代表　**工　藤　武　子**

※日本語訳は表紙裏面

Shinagawa Declaration of a Non-nuclear Peace Area

At the present time, on earth the human race has accumulated a nuclear arsenal quite sufficient to totally destroy itself.
No weapon has ever been developed which has not at sometime been put to use.
History bears witness to this terrifying truth.

We must lose no time in ridding the world of nuclear weapons.
Before the glaring flash fills the sky above our heads.
If we are too late, we will not even be left with a future to lament our failure.

With the heartfelt plea that nuclear weapons be abolished and permanent peace be established, Shinagawa City declares itself a Non-nuclear Peace Area and makes its appeal to the world.
We refuse to allow the manufacture, placement or introduction of nuclear weapons, by whatever country, for whatever reason.
To countries holding such weapons, we say, abandon your nu-clear armaments immediately!

For the future of this beautiful, irreplaceable earth and for all things living that exist upon it.

26th March 1985

Shinagawa City
Tokyo

２０２３　品川区平和使節　派遣レポート

発　行　令和６年３月
発行者　品川区総務部総務課
〒140-8715　東京都品川区広町２-１-36
電話　03-5742-6691
FAX　03-3774-6356
e-mail：somu-kokusai@city.shinagawa.tokyo.jp

第二十一回品川区中学生
広島平和使節派遣
第二十一回品川区中学生
広島平和使節派遣